宮崎医大整形外科

同門会誌

第　3　号

平成3年12月

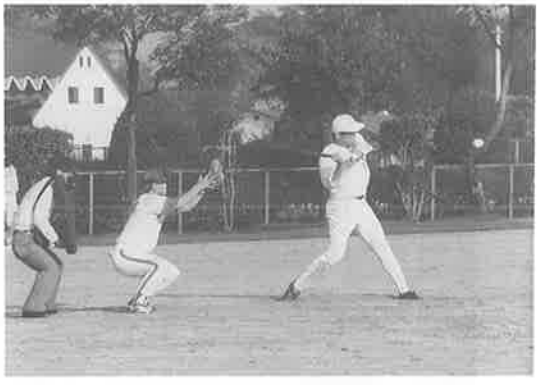
宮崎医科大学整形外科学教室同門会

平成３年度　宮崎医科大学整形外科学教室同門会総会　　Ｈ３．６．８

整形外科医局
野球チーム

野球大会前夜祭

一軍エース



一軍主砲

医局の宴会

オナジカマのメシ!!

同門会でのスナップ その1

同門会でのスナップ その2

同門会での1風景

新入局の面々

医局旅行

勇壮な球磨川

日本三急流　球磨川下り記念　平成三年（1991年）

目　　次

ご　挨　拶……会長　河野　雅行…1
ご　挨　拶……教授　田島　直也…2
随　　想
生涯教育……木村　千仞…3
Dean Smith 先生を悼む……田島　直也…4
Dr. Dean Smith を悼む……黒木　俊政…5
１年ぶりの医者稼業復帰を目前にして……桑原　　茂…6
副医局長として……帖佐　悦男…7
施設紹介
宮崎県立日南病院……栄　　四男…8
宮崎県立こども療育センター……岡本　義久…9
宮崎県立こども療育センター……川越　正一…10
市民の森病院……税所幸一郎…11
宮崎江南病院……森田　信二…12
押川整形外科医院……押川紘一郎…13
渡辺整形外科医院……渡辺　　雄…15
新賛助会員……弓削　達雄…16
新賛助会員……増田　好治…17
新賛助会員……大平　　卓…19
雑　　感
三水会へ御協力を……桑原　　茂…20
海外留学体験……税所幸一郎…21
日米加基礎整形外科学会に参加して……平川　俊一…23
北京にて……伊勢　紘平…24
すばらしき球磨川下り……伊勢　紘平…26
野球大会……伊勢　紘平…28
帰局して……黒木　俊政…29
(天草四郎＋浦島太郎)÷２……金井　純次…30
関東逓信病院麻酔科の研修について……黒木　龍二…31
熊本市民病院麻酔科研修について……柳園賜一郎…32
病理学一年生として……黒木　隆男…33
明日のために……田中　史郎…34
新入医局員紹介……35～38
教室同門の研究業績……39～55
同門会員名簿……56～79
編集後記……80

ご　　挨　　拶

会長　河野雅行

同門会員の皆様、益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。

諸兄のご活躍を見聞きする度に、同門会の存在価値があるような気がして、自分の事の様に喜んでおります。

本年も新しく、正会員、賛助会員の先生方にご加入頂きまして、同門会も益々賑やかになって参りました。

医局の先生方のご活躍も、学会、論文、講演等々、大変立派な成果を挙げていられる様は、誠に頼もしい限りです。

此処数年のうちに、日本整形外科スポーツ医学会を初めとして、大小の学会、研究会等が予定されており、又種々のスポーツイベントへの参加もある様に承っております。

地方に在住する者にとって、大きな学会を開催する事は様々のハンディが有り、大変な事と察せられますが、地方の特色を生かした企画も考えられますし、大学の務めとして、又、宮崎県の医療を向上させる為にも、困難な事が多々御座居ましょうが、是非成功させて頂きたく思います。

本年のトピックスとしまして、会員の川野先生が開業されました。近日中に、山口・栄・佐藤先生がご開業の準備中です。

何れの先生も立派な人格と力量をお持ちの方々ですし、ご開業予定地は地域の大きなニーズのある場所ばかりです。必ずや大成される事と信じます。あらたなる希望と目標に向かって頑張って頂きたいものです。

世の中は目まぐるしく変わってゆきます。諺にも来年の事を言うと云々とありますが、来年どころか来月の見通しが分らない程です。

今は、あまり飛躍した目標は控え目にして、地道な努力が必要な時かもしれません。このような困難な時代にこそ、同門会の存在価値があるとも言えます。会員が相互の連携を密にして、結束して事にあたればこの難局も軽いものとなるに違い有りません。

今後とも同門会活動に、ご協力を宜しくお願い致します。

皆様のご健康とご活躍が今後益々盛んで有ります様に祈念して止みません。

ご　　挨　　拶

教授　田島直也

今年もあと１ヶ月余となり、何かと人の気配にもあわただしさを感じるようになりました。今更ながら１年がすぎるのは早いものと実感しています。

さて、宮崎医大・整形外科教室同門会誌も、昨年12月に第２号を発刊しましたが、ここに第３号の発行の運びとなりました。

ここ１年を振り返ってみても世の中は、湾岸戦争、島原・フィリピンの火山の噴火、ソ連の国家組織の変革等と目まぐるしく変化が起こっています。

教室の方も私が整形外科講座を担当して２年目になり、基本的には前木村千仞教授の方針を引き継いでいますが、時代と共に少しづつ変わっています。現状と今後の展望に就いて若干述べたいと思います。今年度は６名の新入局員を迎え、教室員51名、同門67名、賛助会員20名となり、また、関連病院の方も久留米大井上教授のご厚意で県立日南病院を引き継ぎ、新しい研修病院としての発展が期待されています。

私の仕事としては、脊髄外科関係のもの、生体運動の高次活動の解析、スポーツ医学の運動生理学的研究を行ってきましたが、今後の研究体制としても、①椎間板の chemonucleolysis の生化学、② Biomechanics 、生体工学、生体力学的研究、③新しい Instruments 、生体材料の開発等を中心に行っていきたいと思っています。

整形外科関連学会、研究会も急増し、全国規模の学会等も同時に開催されることも珍しくなくなり、専門的な研究も一段と進んできています。一方整形外科、リウマチ、スポーツ、リハビリ関係の認定医制度も発足し、設定医の獲得、保持も大変になり、何かと慌ただしくなってきています。一つの事を10年間続ける位に腰を落ち着け、基礎まで掘り下げた仕事をしたいと思っていますが、なかなか困難な面もあるようです。臨床面では、現在主に二つのグループ（脊椎グループと関節グループ）で診療を行っていますが、関連病院を含めて見直しを行い、疾患によってはセンターを地域全体の視野の下に作っていきたいと考えています。又、日医の生涯教育にもなっている“健康とスポーツ医学”のスポーツ医・科学的研究も、宮崎県体協のスポーツ科学委員会、宮崎県医師会の健康とスポーツ委員会の活動と連携し、地域医療の一つとして続けていくつもりです。又、昨年９月から月一回（第三水曜日）宮崎市内で開業の先生方と一緒にクリニカルカンファレンスを行っています。今後とも、ぜひ維持させていきたいと考えています。

昨年11月17、18日宮崎市で第80回西日本整形・災害外科学会を開催致しました。一次締め切りには350題以上の申し込みがあり、最終的には一般演題約250題になりました。外人講演はスイスの Prof. N. Gschwend 、又第80回記念講演として整形外科には専門外ですが、最近話題の肝移植の問題について京大小沢教授にお願い盛会のうちに終わることができました。ことに同門の先生方には大変お世話になり改めて御礼しあげます。

又、この７月に開催された第17回日本整形外科スポーツ医学会総会で、二年後の平成５年に第19回同学会を宮崎で行うことが正式に決まり、教室同門の先生には、何かとお世話になりますがよろしくお願いします。

医術は人間の苦しみを救うため、全世界に共通する普遍的なものであると言われていますが、私も、卒前・卒後の教育、研究、診療面に微力を尽くし、よりよい教室作りを目指していこうと思っています。

今後とも同門の先生方の暖かいご支援ご鞭撻を心からお願い致します。

随　想

「生涯教育」

木　村　千　俣

「生涯教育」という言葉が、日本医師会の先生方の間で膾炙されるようになって十数年が経ったように思われる。当時は大学にいたので、その経緯についてはこぼれ話で聞いた程度でくわしくは判らないが、大変結構なことだと感銘していた次第である。

わたし達は学生時代から「医者になったら死ぬまで勉強せにゃならんのだぞ！」と先輩に言われてきたし、意識としては今でも持ち続けている。こうした抽象的というか観念的な事柄は、それ自体大事なことと判っていても、実体が見えないだけに空気のように実感が湧かないし、実害が判然としないために、時間があれば楽しくない努力より、刹那的な楽しみへと傾くのが凡人の常である。

その意味では、近年わが国で48学会が認定医・専門医制度をとり入れて、資格試験や資格維持のための研修医などによる単位取得をすすめているのは、「生涯教育」の目的からは大変理にかなった方法であると考えている。

先般のある学会誌に、学会認定医協議会（Ｈ３．２月）の報告が携載されていたが、医療法改正による医業広告に関する制度の見直しにより、将来、診療科標榜とならんで、医療個人の「〇〇学会認定医」の表示が可能となろう17学会の候補（Ｈ２．７月現在）として、

内科系：内科、小児科、循環器科、神経

外科系：外科、整形外科、眼科、耳鼻咽喉科、小児外科、脳神経外科、形成外科、胸部外科

その他：医学放射線、麻酔、リハビリテーション、病理、臨床病理

があがっているようで、試験制を採用していることが原則とある。何年かのちには他の学会も追認されるであろうが、保険制度その他との絡みについては不明である。日整会、日本ＲＡ学会などで長年認定医制度関係の仕事に携ってきた私としては、外国で行われている同様の制度と比肩できる良い結実を切望するものである。あくまで小市民的点取り虫に限らない態度・姿勢が望まれる。

私が医学部時代に恐れられ乍らも親しみもあった解剖学の忽那将愛教授（医学部長）が、あるときこんな言葉を学生にすすめられた。それは、「学而不思則闇　思而不学則殆」（論語　子路）である。その後、ドイツにも同じ意味の言葉があることを知った。すなわち

“Studium ohne Nachdenken ist gweckls,
Nachdenden ohne Studium, aber, gefahrlich．”

科学する者にとって示唆にとんだ言である。

近年、体力の衰えが気になるようになったが、人の体の中でたった１か所老化しないとされる前頭葉を働かせて、若い医師達と協同歩調をとって行きたいと願っている。今は亡き武見医師会長は、あの多忙な中でも毎夜外国の原著を何ページか読み続けていたという手記からも、「生涯教育」とは言うに易く難行であり、また一方では、人生は前頭葉のキャリアの勝負だ、と痛感する昨今である。

Dean Smith 先生を悼む

田　島　直　也

Dean O. Smith 先生は本年７月突然亡くなられた。先生は私達の宮崎医大整形外科教室に昭和62年８月から昨年８月まで外国人研究生として在籍され、昨年８月に帰国されてからまだ一年もたっていない時であった。

Smith 先生は、日本へは『手の外科の研究』のために、前国立川南病院長の中村良昭先生の紹介で当時の宮崎医大木村教授の下で山口一郎先生と仕事をする事で来日された。教室では手の外科グループに所属され、山口、戸田、中村先生らと共に手の外科の外来、手術に参加されるかたわら、microsurgery の research 、解剖学第１講座の大浦教授、年森助教授らと手の解剖の研究も手がけられていた。

西日本整形外科野球大会にも私達と同行され、前夜祭でスピーチをされるなど全く教室員の一人として行動された。

又、昭和63年３月には久保先生も一緒に車で長崎まで来られて、当時の私の自宅に泊まって頂き、オランダ村など観光を楽しんでもらった事も私の想い出に残っている。

Smith 先生は人なつっこく、誰とでも親しくされ、真面目で、学内にも多くの友人を持っておられた。

私達も英文論文をチェックしてもらい、いわゆるアメリカ的な合理的な考え方を教えて頂き、かえって私達の方がいろいろお世話になっていた。

昭和63年８月には現夫人の純子さん（旧姓　長谷川さん）と西都市で結婚式を挙げられ、和服もよく似合っていた Smith 先生も印象的であった。その後、可愛らしいお嬢ちゃんも誕生されて親子三人平和な生活を送られていた。

昨年帰国された後、ミズリー州のサイグストンで開業されていたが、今年１月頃から頭痛があり、１ヶ月半入院、その後、オレゴン州ポートランドの病院で治療を受けられるも手足のシビレ、神経症状、全身状態も増悪し、御家族、友人の看護もむなしく1991年７月15日永眠された。

私が悲報に接したのは８月であり、まさか間違いではないかと疑ったが、その後奥様が訪ねてこられて詳しくお話を伺うことができた。

在りし日の Dean Smith 先生をしのび御冥福をお祈り致します。

Dr. Dean Smith を悼む

黒　木　俊　政

本年８月に突然の Dr. Smith の訃報を聞き信じられない気持ちでした。Smith 先生とは何故か気の合う関係で、ここ数年間親交を重ねさせていただいておりました。最初は私の拙い英会話の相手をして頂くことから始まり、論文の英文抄録を校正して頂くようになりました。私が "Would you correct my english paper?" とお願いしますと、彼はいつも微笑みながら "my pleasure!" と応え、快く私の拙い英文を校正してくれたものでした。この "my pleasure!" という表現は私の大変お気に入りの言葉になり、Smith 先生との会話にはよくふざけて使ったものです。

Smith 先生は敬虔なモルモン教徒であり、酒、煙草は勿論のことカフェインの入っているコーヒー、紅茶等も口にされていませんでした。日本の教会で出会われた純子夫人との間に愛娘ももうけられ、生活は質素でしたが幸せな生活を送られていました。何回か Smith 先生のお宅に呼ばれ食事をいただきながら、お話をする機会があり、先生のお人柄を益々深く知ることができ仲良くなっていったように思います。先生にはアメリカ人にありがちな陽気なヤンキー気質 —— 兎に角、楽しい人という一面 —— もあり、また整形外科医の前は前は精神科医でもあったということから由来する物事に対してロジカルに冷静な判断・評価をなし得る人という面をお持ちでした。ご夫婦とも敬虔なモルモン教徒であり、お金に固執する方ではなかったのですが、ある夜招かれて先生の家で雑談していると、「もう少しお金がほしいね。」と先生は言われました。純子夫人は「お父さん（Smith 先生のことです）、そんなことは希望しなくても、我々家族は十分幸せですよ。」と少したしなめられてしまいました。その頃、先生ご一家は民間の２ＬＤのアパート住まいでかなり手狭でしたし、身長は190㎝以上でしたから、「もう少し広くて、そしてもう少し鴨居が高かったほうがよいのだけれど……」といたずらっ子が叱られた時のように茶目っ気たっぷりに小さな声で言われていたのが印象的でした。

今、私の家には先生が清武町内を移動するのに使用された自転車があります。アメリカ本国に帰国される朝、私の家まで持ってきてくださったものです。今、こうして先生の訃報をお聞きし、その自転車を眺めるとある種の惜別の感を持ちつつ、先生と過ごした時間が懐かしく思われます。「日本のお医者さんはよく勉強します。だけどアメリカのお医者さんはもっと勉強します。」という先生の言葉を忘れず、そして天国の Smith 先生にいつかお会いした時に、例の茶目っ気にあふれた笑顔で「勉強、ちゃーんとしてましたか？」と言われないように努力しておかなければと思います。

Smith 先生のご冥福をお祈りいたします。

Amen （アーメン）

1年ぶりの医者稼業復帰を目前にして

桑原　茂

医局長として1年を過ぎ、そろそろ体力の限界を感じ始めてきたこの頃です。しかし、平成3年12月を以て戸田君との交代が決まり、この原稿を書いている時点で残り3週間となり、平成4年になったらまず何をしようかといろいろの夢を描き始めております。今年は自分にとっても変化があった年で、ゴルフのやり過ぎを含めたあまり、他人から同情されなかった入院生活、また義兄の不幸など個人的には少々良くない年ではなかったかと思います。一方医局の運営は皆様のご協力により順調に経過致しまして、長期のfllow－upではどうなるかわかりませんが、短期成績は満足すべきものであったと思っています。次期医局長である戸田君は私と違ってすこぶる真面目かつ人間的にもマイルドな性格の持ち主であり、私がひっかき回した医局の整理には適格な人と思っております。

さて、平成4年を迎えるに当たっての目標としては、月一のゴルフ、月8回の手術、そして脊椎外科の勉強などを重点にしていきたいと思っています。皆さんは私を事務屋さんだと思っているでしょうが、変身した私をお目にかけたいと思っています（ただし、目標ですからその点を考慮して読んでおいて下さい）。最後になりますが、医局長を務めさせて頂いた間におかけした御迷惑をおわびすると共に、至らなかった数々の点につきましては御容赦頂きたく思っております。

副医局長として

帖　佐　悦　男

副医局長としての雑感を書くようにとのことでしたが、筆無精の私としましてはなかなか原稿を書く段にはいたらず、締切りが間近となってあわてて筆を握っているところです。さて、田島教室が出帆して１年半が過ぎ教室での研究、臨床なども軌道にのってきました。私は、戸田先生の後任として、一生懸命努力してきたつもりですが、まだまだ経験も少なく未熟ですので十分に任務を果たしていないのが現状です。

一年の行事の一部を思いつくまま挙げますと、１）新入医局員歓迎会があり、そこは裏芸の登竜門です。２）野球大会に向けての練習が始まります。今年こそは優勝が期待されていましたが、来年にお預けとなってしまいました。３）医局旅行があり、今回は初めての企画としまして夜の懇話会を開き盛況の内に終了しました。４）忘年会は、同門会員数が以前と比べ増え、適当な場所を探すのに大変苦労するようになりました。うれしい悲鳴の一つです。

今後は、他の科からも羨ましがられ、新入医局員もたくさんはいるような医局を創るべく頑張りたいと思います。

話しは変わりますが、私の人生訓は、ストリンドベリィの言葉である――苦しみつつ、なおも働け、安住を求めるな、この世は巡礼である――という言葉です。私はストリンドベリィという作家の著書は直接は知りませんでしたがある雑誌の記事にこの句が紹介されて以来、私はこの句を、私の人生訓としています。仕事やいろいろなことで行き詰まるたび、この句を思いだし誰だって大変なんだと自らを励ましています。もともと私はキリスト教徒ではありませんので実際の巡礼の意味はわかりませんが、とにかくこの世は頑張らないと仕方ないんだと理解して自分に言い聞かしています。これからもこの句を心の糧としていくつもりです。

最後に、副医局長となって夜の集まりが増え、元来集まりは好きな私ですが夜は苦手で、以前は９時までの男でした。今では良かったか悪かったかは病気になるまでわかりませんが、時には最後まで保つようになり、なんとかアルコールも嗜められるようになりました。

施設紹介

宮崎県立日南病院

栄　　四　男

宮崎県立日南病院は、昭和23年９月１日、日本医療団油津病院を買収して、県立油津病院として発足し、昭和25年１月、日南市制施行とともに県立日南病院と改称、現在に至っている。平成２年度の診療統計で、診療科12科、病床数336床、職員数281人、１日平均患者数、入院253人、外来456人の規模である。北郷町、日南市、南郷町、串間市を含む、日南串間医療圏の唯一の総合病院として、地域医療に貢献している。しかし開設後43年を経て、建物の老朽化と医療状況の変化に対応すべく、平成９年完成を目途に、病院の全面改築が計画されている。

整形外科は、昭和33年に増設され、以来、久留米大学の関連病院として、平成３年３月末まで医師の派遣が続いた。同年４月より、宮崎医科大学に引継がれ、整形外科医局より３人の医師が派遣され診療を行っている。外傷を中心としながら、変形性疾患、リウマチ、痛風、脊椎疾患等、１日平均外来80人、入院50人程を担当している。平成４年からは、股関節センターの構想があり、一段とレベルアップした内容となることでしょう。院内の各科の協力体制は極めて良く、診療依頼も気易く行える。月一回のスポーツデイと称する夜の会食、３ヶ月毎のゴルフ大会等で親睦が図られている。以前より当院が他の県立病院（延岡病院、宮崎病院）に比べて、全体的なレベル低下が指摘されている。新病院建設をひかえ、地域の中核病院となるため、各科が努力中であるのが現況と言える。

施設紹介

宮崎県立こども療育センター紹介

岡　本　義　久

センターの前身は整肢学園で、昭和62年４月に、医大南に移転して参りました。ポリオから脳性麻痺へと主たる対象疾患が変化し、当初は、手術に困難と戸惑いを覚えましたが、最近やっと脳障害にも有効な手術手技が開発され効果を上げつつあります。

しかし、脳障害による肢体不自由を、四肢の手術で治療する訳ですから、完治が望めない事は当然であり、悩みは尽きません。

次第に、手術に対する理解を得て、手術件数、外来件数共に増加の傾向にあり、これはこどもの数、障害児数共に減少傾向にある中、他県の同種病院へ受診していた子供達が戻って来たためと考えられます。

移転に伴う、高額の歩行分析装置の導入により、手術前後の変化が客観的に観察でき、誰の目にも改善ができる、アナログ表示により、治療への理解が、医師、患者、家族それぞれに深まりつつあります。

術者として、治療の結果を次の治療に生かせるシステムとして、有効に利用しています。

研究面でも、医大からの先生の努力で、装置が埃を被る事なく、稼働しています。

県全体の整形外科医療の役割分担を、少しずつ整理して、より高度な医療に答えられるよう、お互いに、紹介しあえるシステムが作られてゆくことを願っています。

施設紹介

こども療育センター

川　越　正　一

本郷南方より、宮崎医大のさらに山一つ奥の当地にて、こども療育センターとして再出発して、4年の歳月がたちました。周産期医療の進歩に伴う、CP児の重度化、重複化に、種々の工夫や努力が払われ、特に母子入所児に関しては、痙攣のコントロール、感染対策など、小児科領域も含めたtotal careに頭を痛めております。手術は月曜日、外来は火曜日と金曜日、水曜日は都城と延岡の療育相談、その他、保健所検診、身障センター関係の巡回相談、在宅訪問が行われています。

宮崎医大からは、昭和59年より、半年のローテーションで、主に研修医の派遣が行われてきましたが、平成2年7月より、教室のテーマの一つである、バイオメカニクスのリサーチの場の一つとして、位置付けられることとなりました。現在、CP児の診療、術前・術後の評価、また歩行・動作分析に関し、足底圧測定器、大型床反力計、3次元位置計測装置（Locus　Ⅲ－D）、筋電計（4 ch）にて、解析を試みております。一般的には評価困難な、歩行等の動作時の客観的機能的評価が可能な面から、今後はさらに、大学その他の協力をいただくことにより、脊椎疾患、下肢疾患に対するアプローチも計画しております。宜しく、お願いします。また、学会等に参加する機会を戴きまして、装置やソフトの開発に関しては、理学、工学系とのつながりの必要性を痛感するようになりました。

この場をかりまして、当直をお願いしたうえに、データを取らせて戴いた研修2年目の先生方に、厚く御礼を申し上げます。そして、1年目目の先生も、「データ取らせてね」とお願い申し上げます。

業績

① 椅坐位からの立ち上がり動作の分析

川越　正一、岡本　義久、長倉　紘一、
馬場　秀夫、吉田　省二
宮崎県立こども療育センター

田島　直也、山口　一郎
宮崎医科大学
（第80回西日本整形災害外科学会/宮崎）

市民の森病院の紹介

税　所　幸一郎

市民の森病院は緑に囲まれた一ツ葉の地、塩路に昭和58年３月にベッド数100床の病院として開設され、その後増床を重ね、昭和63年１月よりベッド数200床となっています。また平成２年４月より医療法人善仁会市民の森病院となっています。現在の診療科目は常勤医のいる内科、外科、整形外科、泌尿器科の他に、非常勤で診療している皮膚科、眼科、歯科・口腔外科などがあります。またここでは疾患によるセンター診療を行なっており、呼吸器センターとリウマチセンターを併設しています。

整形外科は昭和63年４月より大学から医師が派遣されるようになり、初代整形外科部長として桑原茂先生が赴任されました。その後平成４年リウマチセンターが設立され、木村千仞前教授がセンター所長に就任されています。平成２年６月に桑原茂先生が大学に帰られ、７月より私が引き継いでいます。現在整形外科部門は、リウマチセンター所長の木村千仞先生のほか、私、松田寿義先生、樋口潤一先生の４名で行なっています。患者はリウマチセンターを併設している関係上、慢性関節リウマチの患者がほとんどです。また当病院に受診中の患者には高齢者が多く、変形性関節症、骨粗鬆症、変形性脊椎症、更には大腿骨頚部骨折などもみられます。一方慢性関節リウマチでは骨関節疾患の他に全身性の合併症もよくみられますが、これらに対しては内科、外科、泌尿器科などの協力を得て診察しています。

整形外科で診療している入院患者はリウマチ病棟50床を中心とした慢性関節リウマチ患者だけでなく、他の病棟に入院中で整形外科的疾患を合併している患者さらには他の病院よりリハビリテーション目的で紹介され入院してきた患者など合わせて約75名ほどです。これらの入院リウマチ患者の多くは手術を目的にしています。そのほかに慢性関節リウマチの活動性のコントロール、慢性関節リウマチの合併症（特に間質性肺炎などの呼吸器疾患：呼吸器センターがあるので）に対する精密検査・保存的治療を目的として入院している患者もあります。

手術は主に木曜日、金曜日の午後に行なっています。年間の手術数は約140件です。そのほとんどが慢性関節リウマチに対するものであり、肘・手・膝関節の滑膜切除術、肘の conventional arthroplasty 、前足部の resection arthroplasty 、人工股関節置換術、人工膝置換術などがよく行なっています。その他に高齢者の大腿骨頚部骨折に対する骨接合術、人工骨頭置換術も行なっています。

以上市民の森病院整形外科について紹介しました。

病院全景

施設紹介

『社会保険宮崎江南病院の紹介と近況』

森　田　信　二

私が社会保険宮崎江南病院に勤務させていただくようになり、早１年４ヵ月が過ぎようとしています。当院副院長である上塚先生を差置いておこがましいようですが、当病院36年の歴史と近況を簡単に紹介したいと思います。

当病院は初代院長故三原七郎先生のもと昭和30年11月２日、肺結核外科療法の専門病院として、内科、外科の２診療科、200床で開院されました。開院当時は手術希望患者が殺到し、多くの患者が入院待ちの状態を余儀なくされるほどでしたが、結核患者の減少に伴い昭和40年～45年頃には病院経営は最悪の状態に陥っていたようです。建物の老朽化による一部病棟の閉鎖ともあいまって病院の存続も危ぶまれましたが、出石寛前病院長および関係当局者の御尽力により昭和48年10月改築工事がようやく始まりました。第一期工事が終了する昭和51年頃には鹿児島大学第一外科、宮崎医科大学第一内科、および同整形外科の協力も得られ、病院再出発の時を迎えました。昭和59年３月には結核病棟が廃止され、269（うち整形外科92床）の病床すべてが一般病棟となり、また、同年12月に人工腎センター、昭和60年４月に長崎大学から宮崎県ではじめての形成外科、さらに昭和61年４月にリハビリ科が新設され、診療内容が急速に充実してきました。また、社会保険病院の使命の１つである公衆衛生活動は開院当初より実施されてきましたが昭和59年３月健康管理センターが増築されたのを機に医療スタッフ、設備も充実強化され、更に積極的に検診活動を推進しています。

整形外科は昭和37年に開設され、部長として服部先生、尾田博先生、山田文夫先生、鮫島教彦先生、そして昭和49年７月に就任された現副院長である上塚満先生が歴任され、現在の山口一郎先生に引継がれています。宮崎医科大学整形外科医局からの派遣常勤医として、昭和62年６月より松田寿義先生、立山洋司先生、柳園陽一郎先生、工藤勝司先生が勤務しました。平成３年８月からは上塚副院長、山口部長、永井孝文先生、黒木浩史先生および私の５人体制になり、午前中は毎日回診、外来、検査、午後もほぼ毎日手術をこなしております。上塚先生の理詰な dynamic さと山口部長の hand surgeon らしい繊細さがうまく噛合い、診療の質、量ともさらに向上したように思われます。

病院の改築はさらに進み、本年４月には３階立ての外来・手術・検診・リハビリ棟が完成し、さらに現在、放射線部・栄養課・中材などの工事が進行中です。県内に数少ない第一線の中核病院として今後益々の発展が期待されています。

正面より撮影
左は新築された手術リハビリ病棟、右は管理棟

施設紹介

押川整形外科医院

〈はじめに〉

押川整形外科医院は、昭和56年６月８日、宮崎市のほぼ中央、和知川原に開設致しました。開設時の目標は、地域に密着した医療に加えて、整形外科領域のペインクリニックを専門外来として併設し、宮崎の地に発展させたいということでした。（写真１）

幸いなことに、宮医大整形の田島直也教授がペインクリニック学会員になられていたということもあり、また周囲に、ペインクリニックへの理解の深い先生方が多かったこともあり、10年を経た現在、整形外科領域のみでなく全般的なペインクリニック専門施設の一つとして、来院患者も九州全域となり、早朝より夜遅くまで、院長以下20数名のスタッフがフルタイム稼働している毎日です。

〈施設および診療状態〉

外来は、整形外科とペインクリニック科及び理学診療科とに別れていますが、初診は、患者さんの状態に合わせ、きわめて柔軟に対応しています。ペインクリニックの治療は、完全に独立した部屋で施行し、外来に７床、病棟に６床を有しております。すべて電動ブロック台となっており台ごとに、酸素、エアー、吸引用のパイピングが付設されています。（写真２）

Ｘ線室は、約100㎡で、当院にては、極めて重要な部門となっており、一般撮影装置（天井走行）、透視装置（アンダーチューブ型）、オートフィーダー付き自動現像機（300枚/時処理）、デューブ用装置などを備えています。近く、経皮的髄核摘出術を含めた脊椎疾患に対応するための、新しい新鮮鋭度の透視装置を導入予定です。

手術室は、約150㎡で、準備室を有し、整形外科全般の手術に痴対応できるようにしてあります。牽引手術台、Ｃアーム透視装置、麻酔器、酸素濃度監視モニタ、人工呼吸器に加え、術中のビデオ撮影装置を備えています。近年、学会ではビデオセッションが多くなっており、今後さらに有効な活用を考えています。（写真３）　Ｘ線室及び救急専用の小手術室（約40㎡）にも、麻酔ガスのパイピングを設備しており、外来での小手術や骨折整復などは、こちらを使用しています。理学療法部門は、開設当時より、ＰＴを採用し力を注いできました。そして３年後さらに充実させるために増設し、現在、約200㎡となっています。理学療法及び運動療法を施行しており、毎週２回（木、土曜日）、腰痛教室を開講し、実際の治療に対する理解が深まるよう指導しています。また、このリハビリ室は、職員のためのトータルフィットネスルームにもなっています。（写真４）

〈スタッフ〉

整形外科領域は、院長の外来に加え、週１回医大整形の特診をお願いしており、診療レベルの向上に努めています。また、難治例にしては、適宜、田島教授のご指導を受けています。ペインクリニック領域では、昭和大学麻酔科増田豊助教授及び、前関東逓信病院ペインクリニック科湯田康正部長（現、慈恵医大講師）の特診日（隔週１回）を開設時より設け予約制にて診療を行っています。一般診療におけるブロック療法は、院長が行っておりますが、緊急な場合を除いては全て予約制にしています。

職員は、診療部門では、外来看護婦６名、病棟看護婦２名、理学療法看護婦２名、看護助手４名、ＰＴ１名、放射線技師１名、事務部門は、事務長

以下５名で完全コンピューター管理となっています。

〈終わりに〉

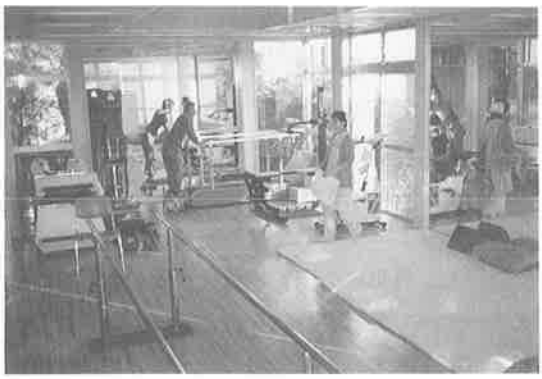
整形外科領域のペインクリニックは、比較的新しい分野であり、患者さんの要求に十分に応えるまでにはなっていませんが、諸先生方のご支援、ご協力により、何とか、現在までやれて来れました。

現在、当院は、その大半が脊椎領域の患者さんであり治療手段の一つとしてペインクリニックが少しでもお役に立つことが出来るようさらに努力して参りたいと思っております。

写真①

写真③

写真②



写真④

施設紹介

開業10年！

渡　辺　　雄

当地で開業してもう10年目になる。宮崎医科大学時代に開業を決めたのだが、人間の人生というのはちょっとしたきっかけで変るもんだなとつくづく思う。予期していなかった開業も今考えると、ひょうたんから駒という感じで奔放な私にとっては結果的にはよかったかなと思う。よく開院パーティーの時に院長のスピーチで必ずといっていいほど“地域医療のために頑張ります”と言う言葉を耳にする。私自身、開業する前はその言葉がなんとなく空々しく聴こえてならなかった。しかし今、開業というのはその言葉そのものだなあと実感している。開業してから“儲けてますか”とか“開業医では無理でしょうから”とかいう言葉をよく耳にする。開業は決して金儲けのためにしているわけではないし、医療レベルが低いわけでもない。諸検査施設が自由に利用できる現在、少なくとも臨床では開業医だからといって劣るものは何もないはずだ。特に同業の開業医からそんな言葉を聞くと本当に情けなくなる。当院は博多駅より地下鉄で30分の前原町高田という福岡市のベッドタウンに位置し、人口は毎年増加しており来年10月には町から市に昇格することになっている。現在常勤医は私一人であるが非常勤で九大と長崎大出身の先生にきてもらっている。来年４月から待望の常勤医が一人ふえる。ベッド数は40床で脊椎の一部の手術を除いて、骨折などの外傷の手術が多いがTHR、TKRなどを含めほとんどの手術を行なっている。手術は現在は私一人でやっているので外来での小手術を除くと年間200例前後が精一杯である。手術は土曜の午後と普通は外来が終った午後７時頃より行なっている。私の労働時間は通常11～12時間である。労働基準法も関係なければ、quality of lifeなどは無縁である。昼休みには勿論、昼食もとれない時も度々で、夕食はいつも11時頃である。看護婦達も私から怒鳴られながらも文句一つ言わずよくついてきてくれる。本当に頭がさがる。そして私が思う存分手術ができるのも、いい看護婦と同時に麻酔医の中の麻酔医ともいえる信頼できる麻酔医がいるからである。

私の趣味はゴルフくらいで、午後９時頃までに仕事が終った時、ゴルフ練習場で１人ボールを打つ時が私の一番開放された時である。そんな時でもポケットベルは遠慮なく鳴る。夜中も患者はくる。私は必ずみる。私の46年もの人生で今が身心ともに一番きつい時かなと思う。そしてこんな忙しい時が華かなとも思う。助っ人がくる来年の春が楽しみだ。

新賛助会員

入会ご挨拶

弓　削　達　雄

この度、賛助会員として同門会への入会を認めていただいて有難うございました。自己紹介を兼ねて私の病院の紹介を致します。私はＳ36年に熊本大学を卒業し家の都合もありまして県立宮崎病院に勤めるべく九大整形外科に入局しました。以後、県立宮崎病院、佐世保共済病院、小倉国立病院等の勤務地を経て、再び県立宮崎病院に舞い戻りＳ47年当地で開業しました。その間、私に与えられたテーマは「L.C.C のペルテス様変化について」でしたが、学位取得寸前に開業することになり断念しました。現在地は宮崎市広島一丁目で繁華街から東に少し離れて閑静な所です。初め医院でスタートしましたが、７年目で形だけは病院にしました。開業のスタイルは整形外科一般で特に特徴を持った診療は行っていません。時々弟（県立延岡病院）が手伝ってくれます。家族は母、妻、娘４人です。趣味は魚釣り、ゴルフ、囲碁です。今後は皆さんの仲間入りをさせていただいたわけですから親しく、お付合いをお願いしたいと思っております。気軽に立寄っていただければ幸いです。

新賛助会員

同門会に出席して

増　田　好　治

このたび、御推薦をいただき賛助会員として参加させていただいたことにお礼申し上げます。

私も開業して十五年目に入ろうとしており、現今の開業医の悲喜こもごもを毎日味わって居りますが、医師会の会合と異なり若い先生方からおじさん族まで巾広い年令層の会合は活気があり仲々もって楽しいことでしたが、同時に初めての貴教室の同門会に出席させていただき、こんなにも多くの医局員、同門会員がすでに勢揃いしたものかとおどろきました。そして若い入局早々の人達のフレッシュなはしゃぎを見て、久しぶりにかつての教室で勉強した頃に思いをはせたことでした。

教室で自分のこころざした分野の研讃に励み、まっ黒くなっている姿は尊いもので、私自身大学までの医局時代の十年間をふり返って、苦しいこともあったけど楽しく一生懸命頑張ったりした思い出は、なつかしくよき時代だったと思います。

いま若い医局の多くの先生達をみていて、このエネルギー、努力の成果を将来に正しくすなおに発揮して生かされる医療界のあり方が準備され、体制がととのえられていないと、向後に希望の灯がともらないなあと、少々概嘆をまじえて思いをはせたことでした。

医局の皆様も現今の第一線の医療については御存知のことでしょうが、人口の老齢化と共にそれを支える若い人口の減少や、ＧＮＰ内での医療への分配の比率の評価のあり方などで節約や制限の考えから、ともすれば制限医療に向かおうともしそうだし、社会の権利意識と最新先端医療への期待感から、病者と医療側との間で、評価にギャップが生じやすい事例では、ともすれば萎縮診療に陥りやすくなって来ているように感じます。

この様に第一線医療のむつかしさは、若い先生が第一線におどり出るまでの研修期間をより長く、きついものにしている様に感じます。

私が医局で頑張っていた時代は、十年間医局の飯をくえば一人前としてキャップがつとまると「おすみつき」をいただいたものでしたが、今では十年生では、ともすれば小僧扱いされることさえあり、はなはだ心外なことだろうと思いますし、開業しようとしても、おいそれと右から左へむかえない状況にあります。このような状況下にあって、いま医師会やその傘下の各部会は、盛んに研修会や学会、勉強会を開き医師の再教育や勉強する姿勢に努めて居ります。

このような努力が将来どのような発展につながるのか非常に関心をもって見ています。第一線医療にたずさわっていると、人口老齢化を反映して高齢の人を加療する機会が多く、胃癌ひとつとっても、糖尿病との合併による補液や代謝上の問題、肺障害や高血圧、虚血性疾患の合併による麻酔や術後管理上の問題、骨粗鬆症や老齢化による筋力低下に伴う脚力低下や自力動作の問題、病後の精神的痴呆化防止を含む対策など高度化複雑化している所から、専門医はさることながら、益々多岐にわたる勉強や研修が要求されるようになったことをひしひしと感じます。

認定医制度や研修の制度がこのような状況下で

生かされ、更なる発展の基につながっていかなければ若い人のエネルギーと努力は生かされないと思いますが、単に厚生省の下での管理システムに組みこまれ巾のせまいものに解釈されてしまわないことを願っています。

段々と話がずれてしまいそうなのでこの辺で筆をおきますが、医局の先生方を中心に益々勉強していい会に発展していきますよう期待します。

新賛助会員

研究生として！

大平　卓

早いもので、地元日向市に開業して12月でちょうど1年となります。大学時代から昨年10月迄は熊市で過ごしておりました。

熊本大学医学部を昭和56年に卒業後、熊本大学整形外科学教室に入局し、臨床では、リウマチ関節外科を専攻しました。大学院では、ピロリン酸カルシウム結晶（CPPD結晶）沈着症の組織学的研究を行ないました。その後、熊本整形外科病院に3年程勤務しました。この間、短期間ではありますが、イギリスのライティントン病院において、Dr. ロブルスキーより、チャンレー式人工股関節手術および、その再置換術についての指導を受ける機会を得ました。

現在、内科の父と2人で診療を行なっていますが、主にリウマチ診療に力を入れており、約100～120人程のリウマチの患者さんが定期的に診察にこられています。手術もできるだけ自分でする様にしていますが、リウマチの患者さんが多いため、月2～3例は人工関節手術を行なっています。

開業してからは、なかなか長期間留守にできず、学会にも思うように出席できないため、少し不自由を感じています。しかし、本年6月より、宮崎医大の研究生とさせていただきまして、ピロリン酸カルシウム結晶沈着症の研究を続けることができ、大変うれしく思っています。実は、私は、臨床より、こちらの方にまだ興味が少しありますので、ここで、ピロリン酸カルシウム結晶（CPPD結晶）沈着症について説明を致します。この疾患はCPPD結晶が、関節破壊をおこすものです。関節炎をおこした場合、偽痛風とよばれています。また、家族性のものを除き、ほとんど60歳以上の高齢者にみられます。以前、私共は、関節内組織を組織学的に調べた結果、CPPD結晶の沈着には、カルシウムイオン、脂肪およびプロテオグリカンを多量に含む肥大軟骨細胞が、重要な役割を果たすことをみつけました。しかし、CPPD結晶は、頚椎黄靭帯などの関節外組織にも沈着することが知られており、今後は関節外組織を調べてみたいと思っています。近い将来には、この結果をまた学会、論文等で発表したいと思っています。今後とも、よろしくお願い致します。

三水会へ御協力を！

桑　原　　茂

毎月第３水曜日に行っておりますオープンカンファレンス（三水会）は昨年９月にはじまり、数えて16回となり、開業の先生方との交流に、また若手の臨床経験に役立っているものと自負しております。三水会の名称は毎月第３水曜日に開く事として、三水会と教授自らが命名されたものです。毎回面白い症例にお目にかかることができ、いろいろな治療法が発表されおおいに勉強させられておりますが、特に御年配の先生方の経験談はとても興味深いものがあります。医局長としてはこの会をますます発展させるべく努力してきたつもりですが、まだ始めたばかりですので、今後いろいろ工夫を凝らしてより実りある会にしていきたく思っております。現在考えておりますのは発会２周年として、日本整形外科学会教育研修会を開催すること、またこれまで提示された症例集を作成することなどですが、この他にも何か御意見がございましたら御連絡頂ければ幸いと存じます。新設の宮崎医大としては何か行うことの多くが初めてのことで、手探りの状態でやらなくてはならず、先生方にはいろいろご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、将来を見つめての会であることを御理解頂き、より一層の御指導の程をお願いする次第でございます。

三水会へ御協力を!!

海外留学体験

税　所　幸一郎

今回田島直也教授より推薦を頂きまして、リウマチ学会海外派遣研修医として平成３年１月８日より約６か月間ヨーロッパで勉強させて頂きました。

最初に私の研修しました病院はフィンランドのRheumatism Foundation Hospital です。フィンランドは北緯60度と北海道より北にあり、フィンランドの北部にあたるラップランドは北極圏にあり、冬は氷点下20度前後になり、夏は白夜が見られるとろです。病院のあるヘイノラ市は首都のヘルシンキ市の北方、バスで約１時間半のところにあり、パルプ工場などのある工業の盛んな町で、人口は18,000人と清武町より少し大きい程度です。また、この近くにはスキーやジャンプ競技などで有名なLahti 市があり、冬期には日本からの競技参加者が見られます。

私はアムステルダム経由でヘルシンキに向かいました。出発した１月といえば、宮崎では一番寒い時期で日没も早いですが、それでも夕方５時頃までは明るく、気温も日中は氷点下になることはありませんが、フィンランドでは夕方３時頃より暗くなり、私がヘイノラに到着しました夕方５時には太陽は完全に落ちており、気温は氷点下15度でした。また雪も深く約70㎝でした。生活道路は完全に除雪されており、交通に不便はありませんでした。

寄宿舎は病院の敷地内にあり、一人部屋、二人部屋、家族用の部屋などがありました。寄宿舎には医者、看護婦（士）などの職員の他に患者の家族なも住んでいました。また遠方の外来患者で日帰りの困難な患者も短期宿泊をしていました。更にはフィンランド各地より研修のために数ヵ月から数年間単身で滞在している医者などもいました。

病院は国、社会保険協会、および35の市からなる委員会で運営されており、ベッド数は約320床あります。病院はフィンランドにおけるリウマチ治療のセンターとなっており、国内各地より患者がきています。そしてその患者のほとんどが慢性関節リウマチの患者です。ほかの膠原病、例えばSLE などは別の治療施設で治療されています。院長は内科医の Prof. Isomaki です。診療科目には内科部門、整形外科部門、小児科部門、リハビリ部門、放射線科部門および検査部門があります。またここではリウマチ外科医として名高い故 Prof. Vainio が活躍されていました。

整形外科部門は Dr. Hamalainen を主任に整形外科医７名と麻酔医２名から構成されています。整形外科は手術および術後管理を行なっており、RA のコントロールは内科で行なっています。病院は月曜日から金曜日の９時から３時まで毎日開いており、土曜日と日曜日は休みです。整形外科では朝８時より９時までＸ線カンファランスを毎日行なっています。外来や手術は曜日によって担当が決まっています。病棟は各病棟毎に内科医、整形外科医、PT などがおり、担当の病棟医がみています。また回診は担当の病凍医と副主任の医者とで行なっています。外来は予約制です。手術は３つの手術室で１日６～９件なされており、患者は手術２～３日前に入院し、術後２～３週で退院していました。

手術数は年間約2,500件であり、人工股関節置換術が中心に行なわえっいます。手術は整形外科医１名が行ない、助手には手術場専任の看護婦が数名付いています。また一人の医者が１日に２～

3例手術をしています。術後は理学治療室所属のPTとは別に各勉棟毎に2名ずついるPTがリハビリを行なっています。

薬剤治療のほとんどは、内以医が行なっており、Prof. Isomakiは病気初期より積極的に抗リウマチ剤を用いていました。抗リウマチ剤としては金製剤が主で、その他に抗マラリア剤やメトトレキサート、サラゾピリンなどが投与されていました。メタルカプターゼは副作用の点から余り使われていませんでした。また副腎皮質ホルモンの関節内注射は内科医も頻繁に行なっていました。

フィンランドでの研修終了後、スイスのチューリッヒにあるSchulthess KlinikのProf. Gschwendのもとで約1か月半研修を受け、6月27日に帰国しました。

約6か月間ヨーロッパで研修しました事を今後の臨床および研究に生かしていきたいと考えております。最後に今回留学に際し、いろいろとお世話になりました田島直也教授をはじめ諸先生方に御礼申し上げます。

日米加基礎整形外科学会に参加して

平　川　俊　一

戸田、松本そして平川の三人は、平成３年10月21日よりカナダのバンフで三日間開催された日米加基礎整形外科学会に参加させていただきました。幸いに我々三人の他に谷口先生も演題が採用され、谷口先生が病気で行けなくなりましたが、四人分のポスターを持参しての学会旅行となりました。

19日に三人で宮崎を出発してから当日夕刻に成田を飛び立ち、まずシアトルに到着しました。更に北へ飛んで国境を越えてバンクーバー、更にロッキー山脈を越えて冬期オリンピックの地、カルガリへ、そこから車で２時間ぐらい後戻りし、ようやくたどり着きます。バンフは人口五千人の小さな町でしたが、国際的な保養地とあって宿泊したバンフスプリングホテルは、中世ヨーロッパの古城を思わせる造りで学会場もホテルの中にあり、男三人旅よりもむしろ新婚旅行の方が良かったような気がしました。着いた日は日陰には雪が少し残っていましたがセーターも要らないような暖かさでした。しかし翌々日には雪が降り、ホテルのすぐ裏にあるマリリンモンローの“帰らざる川”で有名なボー滝も一面銀世界となってしまいました。

学会では三人ともそれぞれ質問者がおり、つたない英語で答えておりましたが、果たして先方にちゃんと伝わりましたでしょうか。外人の参加者の中には医者ばかりでなくエンジニアもかなりの数おり、自分の研究の純粋に基礎的部分のコンピューター処理の煩雑さを考えると、全く羨ましいかぎりでありました。

帰りにちょっとハワイによって命の洗濯をして無事戻って参りました。色々と大失敗やら、とんでも無い事起こりましたがとても紙面には書けませんので御了承下さい。

良い経験をさせていただき、田島教授はじめ教室員の皆様に御礼申し上げます。

北京にて

伊　勢　紘　平

第２回日中友好整形外科連合会議の為に桑原先生の代役として、中国へ行く事が決まったのが９月の事です。突然の中国行きであり、桑原先生と二人で、英語の発表原稿を作りましたが、送られてきたプログラムをみますと座長までしなくてはならず気が重いなあと思いつつ、宮崎を出発しました。大阪発のＪＡＬにて北京に向いましたが、その機内での感想は、上海から北京へと北上したのですが、とにかく、見える所に山がない唯々広い、黄色の大地という事でした。私達のツアーは、ツアーコンダクターを入れて11名でしたが、この時点では、どの先生がどなたか、全くわからない不思議な団体でありました。北京に近づくにつれて、私はどこの誰々ですという自己紹介がはじまり、機内で近くの先生には名刺を差し出すといった具合です。さて北京の空港に着きますと、これまた広い空港でさすがに中国という感じでした。空港（これも北京市内ですが）より北京市内行きのバス（ツアー用）に乗りましたが、なかなか目的地につきません。ガイドさん曰く、「20～30㎞ありますので、もう少し時間がかかります。北京の大きさは、おたくの国の四国地方とほ同じ大さです」（あーつかないはずだ……）

第１日目は北京です。空港より直接故宮に向います。清朝の栄華を極めた宮殿です。最初に出会った門の大さが、宮崎県庁の半分程もありそうなものです。中国の人の心が大きくなるはずだと思いました。故宮を見学して天門広場へ出ました。100万人の人々が集まる広場では、年とった人がタコを挙げ、若い人は、どこそこにたむろしているといった具合です。毛沢東記念館や人民大会党をみながらKunrun飯店（ホテル）へ着き、夕食を済ませて、第１日目は終りですす。

２日目～４日目までは、西安への旅です。西安は唐の都長安といったうが、皆さんにはわかりやすいと思います。まず西安の空港、これはチャーター機の関係で、軍事飛行場に到着しましたが、唯広い所に滑走路という感じで何もありませんが、滑走路の脇には戦闘機が駐機しており、ここで管制塔と思われる場所を写真にとりましたら軍人さんから注意され「こわい所だ」と感じたのが第一印象です。西安の町では、始皇帝陵、兵馬傭、華清池、大雁塔へ行きました。兵馬傭のところでは、いかにも中国らしい話を聞きましたので紹介します。「このあたり（始皇帝陵の周辺です）では昔からこのような人形（遺跡です）が沢山出土していたらしいのですが、政府に申し出ると自分の土地がなくなるので誰も申し出ず、きれいなものは自分の持ち物としてしまった」との事です。華清池は揚貴姫と玄宗皇帝が暮した場所だそうですが、大変綺麗な所でした。西安の町は長安を中心に大きくなったところですが、古い長安の町を囲んだ城壁が今だに残っており、この大きさたるや高さ16ｍ、巾12ｍ延々12㎞四方にわたり、シルクロードの始発地長安の西の門は堂々たるものでした。ただ西安の町で閉口したのは10才ぐらいの「ものもらいの子供」にまとわりつかれた事です。

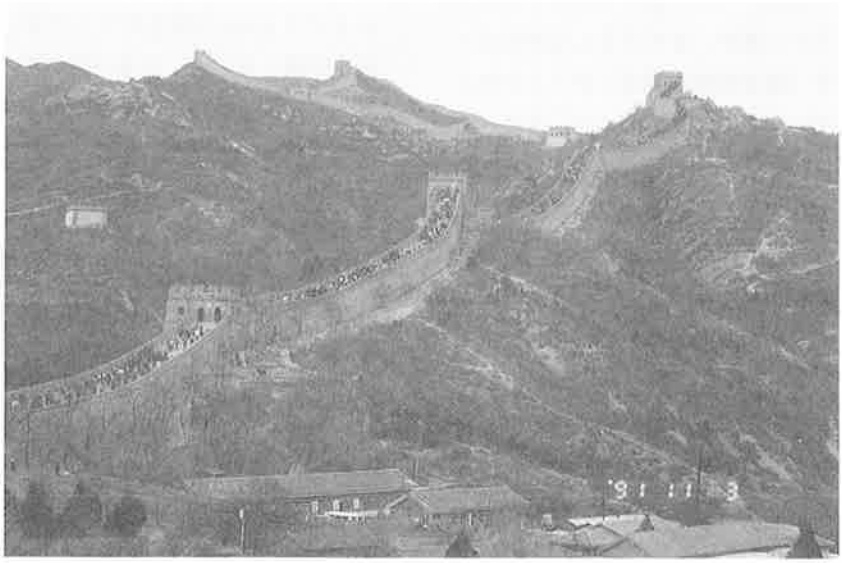
１日目朝５時、西安市内を出発し、例の飛行場より北京へ飛びました。大体のところ時間通りに動きますので、ガイドの人に「きちんとしてますね」と話かけますと「違います、とびあがっても、途中で『燃料切れです、これから引き返します』という事があるので、着くまでわかりません』といわれたのにはビックリでした。

2日と3日は学会です。「代役はきちんとしなければ」と必死にやりまして（すべて英語でしたので）大過なく終りましたが、座長の時、席に居ながら、いつ "Now time is up. I close this session." をしゃべろうかと考えながら、人の英語を聞いていました。学会の印象では、教室の松本先生の仕事である形状記憶合金を使って Scoliosis に対処していたり、ものすごい脊椎の変形を局麻で手術していたりで、驚ろかされる事もありましたが、概していえば、まだまだという感じでした。3日にサヨナラパーティーが人民大会堂で行われましたが、日中共に和気あいあいと過し、4日の午前中より万里の長城へ足を運びました。とにかく壮大な建造物であり、アメリカの宇宙飛行士が「空からみえたのは万里の長城のみだった。というのが肯ずけます。4日の夜大阪へ帰って来たのです。

その他当然ではありましたが中華料理、これは店々ですべて味が違い、くいしん坊の私には、とてもすばらしいものでした。中国に行き、広大な土地と歴史のあとをかいま見て、少し人生感が変わりました。「人生はなるようになる。あせらず、あわてず、メイファーズという事です」

最後に、このような機会を与えて頂いた田島先生、代役をゆずってくれた桑原先生、10日間近く中国へ行かせてくれた教室員の方々に感謝して終りにします。

謝々



すばらしき球磨川下り

(医局旅行記)

伊　勢　紘　平

平成３年８月24日13時30分過、宮崎医大正門前を宮崎交通の大型バスがスルスルと出発した。総勢36名、宮崎医大整形外科恒例の医局旅行の出発です。目的地は、九州山地の中央、風光明眉な街としてよく知られている人吉市です。日本三急流のひとつである球磨川下りが main の旅行です。

この原稿は、旅行記でありますので、逐次、時間を追って書きますが、13時50分過ぎに田野インターへ到着。わずかこの20分間に、同乗の Dr のポケットベルがピーッピーッピーッと鳴り始めたのには、皆唯唖然としました。(やはり Dr は忙しいんですね……)

田野インターから約１時間20分でえびのインターへ到着。この間は、バスの前の席に座った新入局の若き獅子（？）達が、クイズをしながらビールを飲まされる（後方座席は勝手にビールを飲んでいました）というゲームを行いつつ、また、ガイドさんをからかいながら楽しく過しました。えびのインターを過ぎると、約40分で人吉です。このえびの、人吉間は、例の加久藤峠です。昔は一車線の砂利道でしたが、今では、一応２車線の舗装道路で、途中で見れるえびのの町はきれいなものでした。

人吉に着きますと、お城の側を通り抜け、目指す人吉温泉グランドホテル鮎里はすぐです。無事に部屋割も済ませ、ひとフロ浴びて、夜の宴会を待ちました。18時過ぎより宴会がはじまりました。田島教授の御挨拶のあと余興をふんだんに入れた楽しい飲み会です。特筆すべき余興は、股関節グループによるスライドを使った症例報告でした。一座を爆笑の渦に巻き込み、会を盛り上げてくれました。宴会の後は、皆部屋に帰った筈でしたが、殆んどの人は、田島教授の部屋へ押しかけ、そこで二次会です。嬉しかったのは。人吉で父上と開業されております三浦先生が、父上と共に尋ねて来てくれた事です。同門の先生が各地におられますが、医局旅行を、同門の先生方が開業したり出張しているところへ行くのも本当にいい事だなと、この時つくづく感じた次第です。この二次会では、医局の中ではめずらしく松本先生、柏木先生の二人が酔っ払った事です。多分二人共翌朝目を覚した時に「ここはどこ？」と思ったのではないでしょうか。(もしそうじゃなかったらごめんなさい)他の先生、看護婦さんも、最初の部屋割りの部屋に休まれたのは少なかったのではないかと思っています。こうして24日は過ぎました。翌25日は、いよいよ main の球磨川下りです。三艘の川下り舟に分乗しました。日本三急流の一つですので、舟べりを叩く波はドッと来るものから、小さなものまで種々雑多です。先頭の舟に乗っていた人の中には、24日のお酒がたたったのかしりませんが、最初から最後まで水面のみをながめていた人も居られたようです。約１時間の川下りを楽しんだ後に、球泉洞の見学です。秋吉台鐘乳洞のように整備はされていませんが、神秘的な雰囲気が漂っていたようです。この見学の終る頃には、前夜の疲れ、更には川下りの疲れが一行の身体にたまりはじめていたのかも知れません。昼食も終り、これで今回の医局旅行は帰途についた訳です。いつの旅行でも同じですが、帰りのバスは睡眠をとる人の集団となっており、予定通り25日16時に解散となり、楽しかった医局旅行に終止府を打ちました。最後に、この旅行の面倒をみてくれた幹事さんに感謝しつつペンを置きます。ありがとうございました。

球泉洞にて

宴会にて

球磨川下り出発前

野球大会

伊　勢　紘　平

平成３年８月３、４日の両日、熊本大学の御世話による西日本地区整形外科野球大会が、熊本市にて開催されました。我が宮崎医大も総勢30名を越す一団が、今年こそ一軍、二軍共に「優勝するぞ！」の意気でもって熊本に入りました。３日に熊本に入り、その日は前夜祭でありました。我が大学は、本年度の入局者中、二人のグラマー（矢野、松岡両君）の、色気あるダンスの披露で満場の喝采を浴びた事は言うまでもありません。一軍、二軍共に、その後、ミーティングに入り、翌日の作戦を練った次第です。一軍のミーティングの内容については、詳細は不明でありますが、二軍のミーティングは小生の司会ではじまったので、その内容をここに述べます。先ず、司会者として「明日の試合は、ケガをせぬ事を第一に、紳士的に対戦する事が望ましい。しかし、勝つ為の事も考えよう！」

Ａ：それでは、守りの position を決めましょう。

Ｂ：ピッチャーは誰にしますか。投げたい人いますか。

Ａ：誰もいませんね。では・・先生おねがいします。

という具合に position は決定しました。その結果は次の通りです。ピッチャー中村、キャッチャー作、ファースト戸田、セカンド平川（桑原、谷口）、サード川越、ショート永井、レフト松本、センター長田、ライト末永。次に、打順を決める事になりましたが、ここでは３番と４番のみを紹介しますが、３番川越君、４番松本君であったと思います。この３番と４番を今だに記憶していますのは、ツーアウト満塁の好機が、残念ながらここで途切れた為でありました。（一軍のミーティングに関しましては、田島先生におききしましたが、ショックの余り、すべて忘れてしまったとの事でした。二度とこのようなショックのないように心掛けて下さい。）

さて試合当日、一軍は一回戦にて強豪熊大、二軍は一回戦にて山口大との対戦でした。前夜祭のミーティングの有様で結果はおわかりの事と思います。私は家族が熊本ですので、家内が見に来ておりましたが、一言「こんなに早く終るの？」でした。野球大会の成績はこのようなものでしたが、多くの仲間が一つの目標をもって遠征した事はすばらしい事だと思いますし、次の野球大会にはまたという思いを込めて、ペンを置きます。

野球大会二軍メンバー

帰局して……

黒　木　俊　政

本年７月より１年間の宮崎市郡医師会病院勤務を終え、再び教室に帰ってきました。大学整形外科・麻酔科→整肢学園→高千穂町国民健康保険病院→国立都城病院→大学→宮崎市郡医師会病院→大学という経路を辿っている訳ですが、その間に運動生理学を含めたスポーツ医学の臨床・研究について田島教授に御指導いただき、学外に勤務中でも学会発表等の活動ができたのは幸せでした。現在、スポーツ医学では避けて通れない膝・足関節疾患について伊勢助教授の下で研讃を積ませていただいております。

医局に帰っての感想を述べよとの御指示をいただいたのですが、以前にも増して agressive に医局は日々の臨床・研究に対して努力を重ねていると、月並みに書いても面白くありませんので、帰局しての教室内変化の情報を１つ公開したいと思います。

一番驚いたのは、田島教授の現在の昼食は奥様のお手製弁当であったということです。10年以上におよぶ売店や東食堂の弁当による昼食は中止されてしまいました。弁当の中身は売店等の弁当と比較すると確かに雲泥の差があり、奥様お手製のお弁当の方が栄養・愛情の点からはるかに優れていると判定されます。奥様お手製弁当を開けるときの田島教授のやや照れたような「はにかみ」も当初は散見されたのですが、最近では消失したようです。毎朝６時以前には教室にこられ仕事をなさる教授ですから、以前の昼食のときはその健康管理について心配もしていたのですが、これで心配事項は１つ減りました。しかし学問に対しては非常に意欲的かつ前進的なお人柄ですから、飛躍的に改善した食生活により、益々元気になられ、その余波が我々医局員に及ぶのが心配です。（我々はこれを Bentou Effect, 略してＢ－効果と呼んでいます。）またＢ－効果の副産物として最近教授のお腹が少し大きくなったという噂があります。

冗談はさておき、教室は平成４年九州スポーツ医・科学会（田島教授会長、福岡市）、平成５年３月日米スポーツ医学会（田島教授；日本側代表、ハワイ）、平成５年７月日本整形外科スポーツ医学会（田島教授会長、宮崎市）と学会も目白押しであります。せっかくの機会を頂くのですから、学会成功は勿論のこと、少しでも研究の途を進め、励んでいきたいと考えております。

『(天草四郎＋浦島太郎)÷2』

金　井　純　次

天草での１年間の疎開生活も終り、長かった戦争からやっと解放（もしかすると、新たな戦場へ派遣？）された気分。

この１年間のうちに、あれも知らない、これも知らない、あれも出来ない、これも出来ないという調子で、それまでの５年間の知識が砂の城（もともと城というほどの知識もないが？）のようにボロボロと崩れてしまった。

厄介な症例を麻生先生に託し、逃げるようにして宮崎に凱旋（害せん？）。

大学から外に放り出されてみて初めて、それまで多くのObenに囲まれ、どれだけぬるま湯（泥沼？）の医師生活に浸っていたかを痛感。

やや焦る気持ちとホッとした気持ちが入り乱れ、気分はファジー感覚。

頭は、見慣れぬコンピューターについていこうと焦るが、体はまだ天草で鯛の船釣り（釣れるのはガラカブばかりだが！）気分。

時差ボケ（Culture Shock!）のため、病棟の看護婦が皆、若くて美人の白衣の天使に見えてしまう（そのうち目から鱗が落ちるだろうが！）。

天草にいるとき、夢で見ていた夜のネオン街とマイク。でも、右を向いても左を向いても、知らない店、店、店…。毎日アパートの窓から遠くのネオンをただ眺めるだけ。早く都会の生活に馴染みたい。

『なあ、金井君よ。整形外科ちゅうもんは、そんなあまいもんじゃおまへんで。もう一度、……のほうで修行しなおさんといかんで。』という帖佐・柏木Drの声に怯えながら、病棟では、ただ目立たぬように、目立たぬように（矢野のお陰で小さく見えるようになったが！）。

認定医への道はまだ険しく、背中に冷たいもの（ただの秋風？それとも柏木の視線？）を感じる今日この頃である。

関東逓信病院麻酔科の研修について

黒　木　龍　二

本年度から麻酔科研修として東京の関東逓信病院にお世話になることになり、私がその一番バッターとして行かせて頂きました。関逓はベッド数は約700床、手術室ベッド数は８床、ICU は４床とほぼ大学病院並の規模で、手術は１日で10～15例されています。麻酔科は我々のようないわゆるローテーターが５名で、東大整形外科、横浜市大などから、１人ないし２人ずつ研修にきています。スタッフは川島部長のほか、東大麻酔科から４名の先生方が来られていて我々の指導をして頂きます。

川島先生はとくに小児麻酔の権威でいらして、温厚という文字を絵にかいたような先生です。その統率力、指導力はとてもすばらしく、スタッフ一同絶対の信頼をおいています。私が半年間とくに大きな事故もなく、またのびのびと勉強できたのもすべて川島先生のおかげと大変感謝しております。

スタッフは東大麻酔科の５年～10年目の若手バリバリの先生方で、知識面、技術面ともトップレベルの麻酔を教えて頂きました。また私生活でも私のような田舎者になるべく都会のあちこちを知らせてあげようということで、飲み食いに何回も誘って頂きました。

私個人としましては、半年間で麻酔をかけた症例は約180例で、その中には人工心肺を用いた心臓外科手術２例も含めて、足の先から頭までひととおりすべての麻酔を経験しました。中でも印象に残っているのは開胸、開腹による食道手術と心臓外科の手術で、もちろんこれから先にそういう大手術の麻酔などかけることなどないと思いますが、輸液や薬の使い方を含めた全身管理という面ではこれから必ず役に立つと思います。

私のように、生まれてから現在まで宮崎というのんびりとした土地柄にてすごしてきた者にとっては、この関逓での麻酔研修は、麻酔以外のことでも大変いい経験になると思います。麻酔科医だけではなく他科のドクターとも多く知り合いになりましたが、それらの先生方の体験談やものの考え方など聞いてたいへん勉強させられました。また私は、家庭の都合で横浜から通勤しましたが、今まで話しでしか知らなかった朝、夕のラッシュも体験し、今思うと仕事よりもむしろ通勤の方が辛かった印象が残っています。

最後になりましたが、現在県立延岡病院にいらっしゃる佐藤信博先生には公私ともに大変お世話になり、この場を借りて御礼を申し上げたいと思います。貴重な経験をさせて頂きまして本当にありがとうございました。

熊本市民病院麻酔科研修について

柳　園　賜一郎

平成３年７月からこちらにきて早くも３ヶ月が経った。学生時代から宮崎を出たことがなく、県外での生活が初めてで、何から何まで戸惑うことばかりであった。

巨人の佐門豊作が喋っているような「…するったい。」「なんばととっとな。」「はよしなっせ。」の言葉が飛び交うなか、ようやく生活のパターンがつかめてきたなと思ったら、もうすでに研修期間の半分が過ぎてしまった。

熊本市民病院を簡単に紹介すると、熊本の市電の端にある健軍のそばの江津湖畔にある８階建ての総合病院で、内科、外科をはじめ武内先生のいらっしゃるリウマチ科の他、有名なものとしてはNICU（新生児集中治療室）のあるベッド数580のたいへん大きな病院である。

その中の麻酔科は部長の尾方先生を筆頭に医長の満瀬先生の他、３人の熊大麻酔科の先生と、熊大２外科からの研修医の先生、そして自分の計７名である。

定期手術の麻酔を一手に引き受ける他に、ペインクリニック外来、あるいは急患の麻酔と猫の手も借りたい忙しさの中で、学生時代のない麻酔科の知識もとうに消え去った自分が、その忙しさを倍増させているのが現実である。

実際、どのような麻酔をさせてもらっているのか３ヶ月を経過した時点でまとめてみると、麻酔症例82例、うち全身麻酔36例、硬膜外麻酔28例、脊椎麻酔13例、全麻＋硬腹外麻酔５例であった。

入院科別では、婦人科28例、外科18例、耳鼻科15例、形成外科、整形外科ともに10例、眼科、泌尿器科３例ずつであった。

単純に計算すると約160例程の症例を６ヶ月間に経験させてもらえることになる。

麻酔科研修の目的を自分なりにまとめてみると、

１．救急蘇生の基本的手技をマスターする事、バイタルの把握、静脈路、気道確保の手技を習得し、心電図モニターから血液ガスを含めたデータの把握、対症的に使用する薬剤の種類、作用機序、量を知る事。

２．使用する薬剤、手技の怖さを知る事。

普段なにげなく使用している薬、手技でも思いがけない作用があって、副作用の知識があるのとないとでは、対処の早さが全く違ってくるという事を認識する。

３．麻酔医の目で外科医（整形外科医）を見る。

これまでどちらかといえば手術申込書を書きさえすれば、あとは麻酔科の仕事で、決まった検査だけして、異常があれば、内科、外科にコンサルタントしておけばいいというのが正直な気持ちであった。術前、術中、術後の本当の管理をしてこそ初めて手術ができることをしみじみと感じた。

はたして自分は何人目の研修医なのだろうと思い調べてみると、昭和53年の初代森山先生、三浦先生と続いて28代目であった。

時々、手術の既往のある患者さんの昔の麻酔表をとりだしてみると、どこかで見た懐しい字で苦労（？）のあとが記載してある。ああ、この先生もこの市民病院で研修していたんだなあと思うと、昨日の挿管の失敗や硬膜外麻酔でのdura puncture のショックもやわらぎ、今日もまた元気に楓荘７号室のドアを開け、最近めっきり冷え込んできた熊本の朝の空気を吸い込んで、抄読会に遅れないように足早に病院へ向かう。

病理学一年生として

黒　木　隆　男

整形外科に入局して4年目になります。今年4月より、第2病理に出向しています。病理では一般外科病理診断と骨肉腫細胞の培養を試みています。病理診断では、全科から提出された標本の診断を行うわけですが、標本を診てもなかなかわかりません。臨床にいるころは、標本を提出して報告がなかなか戻ってこない場合「遅いな」と思っていましたが、実際自分が病理に行ってみてまず感じたことは、「病理の先生は自分が提出した標本だけを診ているのではない」ということです。整形外科の病理は他科と比べると治療に直結しているのではないようです。なぜなら臨床診断でほぼ診断が確定しているため、病理診断を待たずに治療を開始できるからだと思います。しかし、骨軟部腫瘍に関しては病理診断に診断根拠を求めるのは他科と同じだと思います。病理の先生は組織を診れば診断が付けれると思っている先生はまだまだ多いと思いますが、臨床的なback groundがなければ診断は無理だと思います。特に骨腫瘍に於いては画像の情報が病理診断においても大きなweightを占めています。ですから病理診断依頼書はできるだけたくさんのデータを必要とします。ある大学の病理教室はレントゲンを添えて提出しなければ診断は行わないそうです。病理医にとって整形外科から提出される標本は分かり難いものの一つであるようです。最近までに病理診断を幾つか行ってきて（他科のものを含めて）感じたことの一つに、整形外科から提出される病理標本はどうしても、piece by pieceになるため形態が捕らえにくく、疾患単位の特徴が失われ安いのではないかと思います。

まだまだ、かけだしで何もわかりませんが培養の技術と、整形外科病理を一通り自分のものになるように勉強して行きたいと思います。

明日のために

田　中　史　郎

○月●日

目が覚める。朝の7時頃だろうか。体がだるい。昨夜もなかなか寝つかなかった。もう一度眠ろうとしたが眠れない。黒い光が僕を包み込み、無限の時間が津波の様におそいかかってくる。逃げ場はなかった。助けてくれと叫ぶ気力もなかった。

僕はやっとのことで起き出して何かを探そうとした。

「あんまりの心寒さに裏庭をほじくりかえしていると、かなしい色の水が湧いて、だぁれもいなくなっちゃった。」（たま「らんちう」より）

☆月★日

今日も部屋に一人。いつからだろう、こうしているのは。そして、いつまで続くのだろう。

「自分の秘密を打ち明けられる世界がある。それは僕の部屋。夢を見て、明日を考え、祈る。涙を流し、ため息をつき昨日を笑うんだ。

今、闇の中で一人ぼっち。でも恐くはない。僕の部屋にいれば。」

（The Beach Boys「In my room」より）

◎月◇日

うるさい。静かにしてくれ。そんなに急いでも仕方ないだろう。人類は破滅に向かって確実に収束しているのだから。こんなやり方では宇宙の迷は永遠に解けないだう。たまには河原に出て草の上にすわり、風に吹かれながら“川の流れ”を見つめてみませんか。

「西郷君、いいかげんにしないか」（司馬遼太郎「翔ぶが如く」より）

□月■日

夜の街をあてもなく彷徨う。公園や街角に行き場のない若者たちがたむろする。意味の無い言葉を発し、無邪気にじゃれあう。自分と彼らと何が違うのだろう。心の奥深くにあるものは、たぶん、同じではないのか。

「身の内に火のようなものがあります。じっとしていると、悶え狂いそうになります。」（司馬遼太郎「酔って候」より）

△月▲日

そろそろ立ち上がろう。同じ場所にすわっていられないのはよくわかっている。もうすぐ風向きも変わるだろう。ステージの脇で、自分の出番を待っていた、あの時の気持ちを忘れたわけではないのだから。

今年のことは忘れない。人々は明日も虚しい営みを続けていくだろう。それでもいい、少し壊れかけた地球の上を歩いていこう。明日のために。

「私のことを覚えていてほしいの。私が存在し、こうしてあなたのとなりにいたことをずっとおぼえていてくれる？」（村上春樹「ノルウェイの森」より）

新入医局員自己紹介（順不同）

氏　　名　矢野浩明
生年月日　昭和40年４月７日生
出身高校　高鍋高校
出身大学　宮崎医科大学
血液型　Ａ　型

初めまして、入局１年目研修医の矢野と申します。今年６月より入局し、早くも５ヶ月の月日が過ぎ、現在、脊椎班のメンバーとして苦戦苦闘の毎日を送っております。

入局のきっかけは、ポリクリを回って印象が良かったことも一つにあげられますが、大学入学以前より、卒業したら整形外科にと心に決めており、やはり、その通りになったという次第です。

５ヶ月過ぎて医療の現場というのは、学生時代描いていた理想とは大きく異なり、こんなにまでも体力が必要なのかと、再び学生時代に言われつづけてきたことば“医者は体力だ”を思い出しております。

整形外科の医局は、医療、学問の他にも、スポーツにも力を入れて特に、夏の野球大会にはさらに力を入れてがんばっているのが、とても身にしみてわかりました。

“91年の大会は、私が打たれて負けてしまいました。すみません。来年こそはがんばります。”（でも100球肩で、中５日でないと無理です）

この医局に入局したからには、精一ぱいがんばりますので、宜しくお願い申し上げます。

氏　　名　松岡知己
生年月日　昭和40年７月１日生
出身高校　熊本県立八代高校
出身大学　宮崎医科大学
血液型　Ｏ　型

国試には受かったものの、整形外科に入局して数ヵ月でわかったものは、自分が何も知らないということであった。そして、整形外科の範囲がとても大変なことだとわかり、自分がどれだけできるか不安です。しかし、少しずつでもやっていこうと決心した。幸い、医局には親切な先輩方がいて御指導してもらっています。その好意に甘えることなく前進しつづけようと努力していきたいと思います。ひとつよろしくお願いします。

氏　　名　本　荘　憲　昭
生年月日　昭和38年５月３日生
出身高校　福岡県立城南高校
出身大学　宮崎医科大学
血 液 型　Ｏ　型

６月に宮崎医科大学整形外科教室に入局して以来、３ヶ月が過ぎました。仕事を始めてからは、毎日失敗の連続です。病棟では包交処置の方法、薬剤の処方等、今だに習得できておりません。

また、患者さんに対しての接し方も難しく全ての事を諸先生方から学ぶつもりでがんばっている次第です。

小生が整形外科を選んだ理由は、高校からずっとラグビーを続けており、怪我をした時、いつも整形外科に御世話になっていたからです。怪我をしても先生方から励まされ、いつも感謝しておりました。その様な理由から自然と整形外科に興味を持つ様になりました。

研修医としての自分は、まだまだ未熟者です。与えられた仕事を満足にすらできないのが現状であります。その様な時、諸先生方がフォローして下さり感謝の気持ちでいっぱいであります。しかし、逆に言えば、自覚が足りないと思います。そのような自分を戒しめて焦らず一歩一歩前進したいと思っております。

これから多くの困難があると思いますが、毎日を修練の場として自分を鍛えたいと思っている次第です。

自分の情熱を病気、怪我で苦しんでいる人に傾けられる様な医師が小生の理想像です。今は失敗ばかりして、その情熱が空回りしていますが、日々ささやかな努力をして、少しでも理想像に近づこうと思います。

同門会の諸先生方、これから御指導よろしくお願いいたします。

氏　　名　末　永　　治
生年月日　昭和40年11月11日生
出身高校　宮崎西高等学校
出身大学　宮崎医科大学
血 液 型　ＡＢ型

今年入局しました末永です。出身は宮崎で、小学、中学時代を緑豊かな南郷村ですごし、宮崎西高へ４年間通い、宮崎医大をなんとか６年間で終え、整形外科医局に入局させていただきました。入局してはやくも５ヶ月位たちますが、いまだにとまどってばかりの毎日です。少しずつの経験のつみ重ねを大事にしていけば、だんだん仕事も覚えてくるだろうと思っていたのですが、なかなかそれも難かしく、地道に自

分なりに頑張っていこうと思います。

最近自分の未熟さ、無能さをつくづく痛感していますが、諸先輩方についていくべく、又、少しでもはやくまともな医者になるべく努力していきたいと思います。

どうぞよろしくお願い致します。

氏　　名　寺　本　憲市郎
生年月日　昭和39年３月31日生
出身高校　日向学院高等学校
出身大学　埼玉医科大学
血 液 型　Ａ　型

入局して半年がたとうとしております。私は、出身大学が当大学ではないため、実家が宮崎とはいえ最初はこちらへお世話になるかどうかは、入局のぎりぎりまで決めかねていました。最終的に戻ってくる事を決めたのは、国家試験の発表前に、一度お話をうかがおうと思い田島教授にお会いしてからですから、今年の５月の始めの頃でした。

入局してからは、大学内の右も左も分からず、検査等に行くにも道を尋ねるしまつで、医局の諸先輩方にも大変ご迷惑をおかけしたと思います。今では、なんとか病院内にも慣れ、少しは余裕も出てきたような気がしています。

医局の中は大変慣じみやすく、新入局員の他の５人も気がねなく話せ、慣れるのにそれ程時間はかかりませんでした。

まだまだ一人では何もできず、他の先生方には御迷惑ばかりおかけしていますが、できるだけ多くのものを、できるだけ早く吸収していき、技術的にも人間的にも一人前の医者になれるよう努力していきたいと思います。これからも宜しく御指導の程お願い致します。

氏　　名　長　田　浩　伸
生年月日　昭和40年５月14日生
出身高校　宮崎西高等学校
出身大学　宮崎医科大学
血 液 型　Ａ　型

早いもので、６月に入局して５ヵ月の月日が過ぎました。疾患を把握し、患者さんを理解するというレベルには程遠く、病棟業務を覚えるのにオロオロした日々だったように思います。

わたしは入学当初より整形外科に進もうと考えておりました。わたしの母は長いこと慢性関節リウマチを患い、私が大学３年のときに他界致しました。そんないきさつもあり、リウマチ診療の第一線で働ければと考え、整形外科を目指していました。学生時代後半のポリクリにあたって、慢性関節リウマチの疾患自体の不透明さ、コントロールに難しさが分かるようになり、どうしようかと迷いながら学生生活後半を過ごしました。入局した今でも結論を見いだした訳ではありませんが、ゆっくり時間をかけて考えて行きたいと思います。

自分は研修医の期間を含めしばらくの間、医局のカリキュラムに従い、整形外科一般の知識、技術を習得して行かなければならない身です。働き初めて５ヵ月が過ぎてしまいましたが、身についた知識と技術は無に等しく、また、社会人としての自覚もまだまだ足りず、時々見え隠れする自分の甘えを反省する日々が続いております。

そんな自分を、病棟において親切に御指導、フォローしてくださる先生方に心より感謝しております。また、大学外に勤務することになれば同門の先生方にも、まだまだ未熟なため何かとご迷惑をおかけするとは思いますが、医療社会の一翼を担える社会人、臨床医を目指して努力して行く所存ですので、長く続く道程における御指導、ご鞭撻の程よろしくお願い致します。

氏　　名　鶴　岡　一　人
生年月日　昭和37年１月６日生
出身高校　石川県立門前高校
出身大学　札幌医科大学
血 液 型　Ｂ　型

みな様、はじめまして。本年10月に札幌医大救急集中治療部よりこちらへ転任してきました、３年目のツルオカです。諸先生方から暖かい歓迎を受け、仕事にもようやく慣れてきた今日このごろです。念願の夢である東京ドームでの整形外科学会野球大会に出場出来る様、みな様の力になる様がんばります。今後ともよろしくお願いいたします。

教室同門の研究業績

◆原著発表

1　脊椎のスポーツ外傷と障害

田島　直也

臨床スポーツ医学　7巻2号，P137－216，1990

2　腰椎椎間板ヘルニア

田島　直也

今日の治療指針 Today's therapy　1990年版 医学書院　P574－575，1990

3　スポーツにおける障害と予防

田島　直也

健康情報シリーズ Hygeia 第4号 宮崎医科大学 保健管理センター 1990

255

4　RA 上位頚椎亜脱臼に対する Roosen－Trauschel compression clamp の使用経験

津曲　孝康　　木村　千佴　　田島　直也　　桑原　　茂

税所幸一郎　　立山　洋司　　浪平　辰州

九州リウマチ　9巻，P83－86，1990

5　医学部学生・整形外科医局員を教育するスポーツ医として

田島　直也

日整会誌　64巻2号，1990

260

6　高齢者における頚椎疾患手術例の検討

金井　純次　　田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一

黒木　俊政　　柏木　輝行

整形外科と災害外科　38巻3号，P1245－1248，1990

262

7　モアレ法による学童側彎症検診の再検討

黒木　俊政　　田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一

金井　純次　　柏木　輝行

整形外科と災害外科　38巻4号，P1604－1607，1990

286 8 腰椎疾患手術後の腰痛．坐骨神経痛について

田代　宏一　　田島　直也　　松本　宏一　　黒木　俊政
金井　純次　　柏木　輝行

整形外科と災害外科　38巻4号，P1671－1676，1990

254 9 現場におけるスポーツ医学の活用―某実業団柔道選手におけるスポーツ障害と現場からの要望

黒木　俊政　　田島　直也　　押川紘一郎

Sports medicine，3号　P117－121，1990

261 10 長距離陸上競技者における腰痛

黒木　俊政　　田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一
金井　純次　　柏木　輝行　　押川紘一郎

西日本脊椎研究会誌　16巻1号，P28－30，1990

11 環軸椎亜脱臼の検討

松本　宏一　　田島　直也　　田代　宏一　　黒木　俊政
柳園賜一郎　　田中　史郎

西日本脊椎研究会誌　16巻2号，P234－236，1990

256 12 小児骨折の疫学的研究

田島　直也　　武内　晴明　　久保伸一郎　　木村　千仞
浜田　　稔

日本整形外科スポーツ医学会誌　9巻．P111－113，1990

243 13 慢性関節リウマチ後足部変形と足部関節変化

税所幸一郎　　木村　千仞　　田島　直也　　桑原　　茂
立山　洋司　　津曲　孝康　　浪平　辰州

日本足の外科研究会雑誌　11巻，P1－3，1990

14 A New method for Measuring Stress and Strain in Microscopic Anatomical Systems.

Dean O Smith　　Naoya Tajima

Journal of the American Association of Osteopathic Specialists
Vol 11，No. 8，P 9－10，1990

15 『良きスポーツドクターとは』医学部学生，整形外科医局員を教育するスポーツ医として

田島　直也

Sports medicine Summer　No. 4，P115－117，1990

16　Personal View．学校医に整形外科の参加を望む

整形．災害外科　33巻1号　P1337，1990

268

17　RA膝伸展強直例に対する人工膝関節置換術の経験

税所幸一郎　田島　直也　桑原　茂　麻生　邦典
金井　純次　木村　千仞

関節の外科　17巻3号，P156－159．1990

18　（誌説）日整会認定スポーツドクターに想う

田島　直也

整形外科　41巻12号，P1876，1990

19　頚椎後縦靭帯骨化症手術症例の検討―形態学的変化を中心として―

田代　宏一　田島　直也　松本　宏一　黒木　俊政
柳園賜一郎　永井　孝文　黒木　龍二　田中　史郎

整形外科と災害外科　39巻1号，P339－343，1990

20　腰椎々間板ヘルニアに対するLove法の手術成績―第1報―

黒木　俊政　田島　直也　松本　宏一　田代　宏一
柳園賜一郎　田中　史郎　永井　孝文　黒木　龍二
押川紘一郎

整形外科と災害外科　39巻2号，P471－474，1990

264

21　宮崎県における脊柱側彎症検診の現状と問題点

黒木　俊政　田島　直也　柳園賜一郎　永井　孝文
黒木　龍二

宮崎県医会誌　14巻，P193－197，1990

22　医学部学生，整形外科医局員を教育するスポーツ医として

田島　直也

日本臨床整形外科医会会誌・15巻2号，P116－118，1990

23　大転子移行術

長鶴　義隆

整形・災害外科　33巻，P335－342，1990

24　股関節症に対する寛骨臼球状骨切り術（SAO）の適応と限界

長鶴　義隆　　平川　俊一　　森田　信二　　帖佐　悦男

日本整形外科学会雑誌　64巻，P584，1990

25　内反股に対する骨形成的大腿骨外反骨切り術

長鶴　義隆　　平川　俊一　　森田　信二　　麻生　邦典

柏木　輝行

中部日本整形外科災害外科学会雑誌　33巻，P349－351，1990

26　足関節外側側副靭帯損傷の治療経験

麻生　邦典　　長鶴　義隆　　三浦　宏典　　河野　雅行

整形外科と災害外科　38巻，P1012－1018，1990

27　CPの股関節障害に対する治療経験

森田　信二　　長鶴　義隆　　平川　俊一　　三股　恒夫

麻生　邦典

整形外科と災害外科　38巻，P1205－1207，1990

28　大転子移行術の検討

長鶴　義隆　　平川　俊一　　森田　信二　　麻生　邦典

中部日本整形外科災害外科学会雑誌　33巻，P1236－1238，1990

29　先天性股関節脱臼に対する治療経験

平川　俊一　　長鶴　義隆　　森田　信二

西日本小児整形外科学会雑誌　2巻，P53－55，1990

30　寛骨臼球状骨切り術における自己血輸血法と低血圧麻酔

長鶴　義隆　　平川　俊一　　三浦　広典　　三股　恒夫

帖佐　悦男　　森田　信二　　麻生　邦典

整形外科　41巻，P1727－1732，1990

31　亜脱臼性股関節症に対する寛骨臼球状骨切り術（SAO）の成績

長鶴　義隆　　平川　俊一　　森田　信二　　帖佐　悦男

柏木　輝行

Hip Joint　16，P144－149，1990

32　股関節症に対する臼蓋形成術の検討

平川　俊一　　長鶴　義隆　　森田　信二　　浪平　辰州
永井　孝文

整形外科と災害外科　39巻，P160－162，1990

◆症例報告

265

1　腸骨に発生したEosinophilic Granulomaの一例

黒木　俊政　　田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一
柳園賜一郎　　永井　孝文　　黒木　龍二　　林　　透

宮崎県医会誌14巻，P234－237，1990

2　大腿骨骨幹部疲労骨折の一例

松田　寿義　　税所幸一郎　　木村　千仞　　田島　直也
武内　晴明　　桑原　　茂　　金井　純次　　麻生　邦典
津曲　孝康

整形外科と災害外科　39巻2号，P724－727，1990

266

3　Tiopronin が有効であった悪性関節リウマチの一例

税所幸一郎　　松田　寿義　　木村　千仞　　田島　直也
桑原　　茂　　麻生　邦典　　金井　純次　　谷口　博信
後藤　一成

九州リウマチ　9巻，P237－240，1990

257

4　下肢癌性疼痛に対してアルコールによる腰部神経根ブロックが著効を奏した例

黒木　俊政　　田島　直也　　押川紘一郎

ペインクリニック　11巻5号，P689－693，1990

5　水泳飛び込みによる頚椎脱臼骨折の1例

柏木　輝行　　田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一
黒木　俊政　　金井　純次

西日本脊椎研究会誌　16巻1号，P4－6，1990

6　MRSA による小児大腿骨頸部骨髄炎の1治療経験

柏木　輝行　　長鶴　義隆　　平川　俊一　　森田　信二
三股　恒夫　　田辺　龍樹

整形・災害外科　33巻，P1655－1658，1990

◆学 会 報 告

1　脊髄腫瘍が疑われた頚椎々間板ヘルニアの一例

永井　孝文　　田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一
戸田　　勝

第19回宮崎整形外科懇話会，1990，1，宮崎

2　成人の Neurofibromatosis Scoliosis の２治療例

柳園賜一郎　　田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一
黒木　俊政　　永井　孝文　　黒木　龍二

第19回宮崎整形外科懇話会，1990，1，宮崎

3　頚部リンパ節生検による副神経麻痺の１症例

中村　誠司　　戸田　　勝　　黒木　隆男　　田島　直也
木村　千仞

第19回宮崎整形外科懇話会，1990，1，宮崎

4　肘部管内ガングリオンによる尺骨神経麻痺の１例

坂本　康典　　戸田　　勝　　中村　誠司　　田島　直也
木村　千仞

第19回宮崎整形外科懇話会，1990，1，宮崎

5　骨盤に発生した Eosinophilic Granuloma の１例

黒木　俊政　　田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一
柳園賜一郎　　黒木　龍二

第19回宮崎整形外科懇話会，1990，1，宮崎

6　成人型ビタミンＤ抵抗性骨軟化症を疑わせた１例

田中　史郎　　田島　直也　　武内　晴明　　松本　宏一
柳園賜一郎　　田代　宏一　　黒木　俊政

第19回宮崎整形外科懇話会，1990，1，宮崎

7　多発性静脈血栓症を伴って急死した慢性関節リウマチの１症例

金井　純次　　桑原　　茂　　市成　秀樹　　税所幸一郎
津曲　孝康　　麻生　邦典　　木村　千仞　　田島　直也
谷口　博信

第36回九州リウマチ研究会，1990，3，福岡

8　仮骨延長法による脚延長の２例

黒田　宏　武内　晴明　平川　俊一　黒木　俊政
立山　洋司　黒木　隆男　黒木　龍二　田島　直也
第79回西日本整形・災害外科学会，1990，６，福岡

9　下肢の骨・関節結核の２例

黒木　俊政　武内　晴明　平川　俊一　黒田　宏
黒木　隆男　黒木　龍二　田島　直也
第79回西日本整形・災害外科学会，1990，６，福岡

10　胸骨骨髄炎後に胸骨部再建術を行った１例

鳥取部光司　田島　直也　松本　宏一　田代　宏一
戸田　勝　中村　誠司
第20回宮崎整形外科懇話会，1990，７，宮崎

11　最近経験した骨肉腫の２例

黒木　隆男　武内　晴明　平川　俊一　黒木　俊政
津曲　孝康　黒田　宏　田島　直也
第20回宮崎整形外科懇話会，1990，７，宮崎

12　診断困難であった拍動性手背部腫瘤の１例

園田　典生　戸田　勝　中村　誠司　田島　直也
第20回宮崎整形外科懇話会，1990，７，宮崎

13　胸髄くも膜のう胞の１例

松田　寿義　田島　直也　松本　宏一　田代　宏一
鳥取部光司　尾田　朋樹　坂本　康典
第20回宮崎整形外科懇話会，1990，７，宮崎

14　診断に難渋したベーチェット病による膝関節水腫の１例

黒木　隆男　柏木　輝行　黒木　俊政　桑原　茂
田島　直也　武内　晴明　井上　勝平
第37回九州リウマチ研究会，1990，９，鹿児島

15　椎間板ヘルニア様症状を呈した硬膜内クモ膜嚢腫の１症例

押川紘一郎　田島　直也　増田　豊
第24回日本ペインクリニック学会，1990，７

16　胸髄くも膜嚢胞の１例

黒木　隆男　　松田　寿義　　松本　宏一　　田代　宏一
桑原　　茂　　田島　直也
第34回西日本脊椎研究会，1990，10，高知

17　内反股及び視力障害を呈した大理石病の１例

森田　信二　　長鶴　義隆　　平川　俊一　　浪平　辰州
永井　孝文
第６回九州小児整形外科集談会，1990

18　Cybex machine Ⅱによる膝関節伸展・屈曲力の検討

黒木　龍二　　田島　直也　　黒木　俊政　　柳園賜一郎
永井　孝文　　武内　晴明
第19回宮崎整形外科懇話会，1990，１，宮崎

19　宮崎県における脊柱側彎症検診の現状と問題点―過去９年間の結果について―

黒木　俊政　　田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一
柳園賜一郎　　永井　孝文　　黒木　龍二
第19回宮崎整形外科懇話会，1990，１，宮崎

20　整形外科領域におけるペインクリニック的アプローチ―腰仙部神経根造影・ブロック

黒木　俊政　　田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一
柳園賜一郎　　永井　孝文　　黒木　龍二　　押川紘一郎
第６回宮崎痛みの研究会，1990，１，宮崎

21　骨粗しょう症とその予防

田島　直也
宮崎市健康教育講演，1990，２，宮崎

22　スポーツ障害と予防について

田島　直也
宮崎県スポーツ指導者研修会講演，1990，２，宮崎

23　RA 膝強直例に対する人工膝関節置換術の経験

税所幸一郎　　松田　寿義　　木村　千仞　　田島　直也
桑原　　茂　　麻生　邦典　　金井　純次
第20回人工関節研究会，1990，２，京都

24　慢性関節リウマチと麻酔

税所幸一郎　　津曲　孝康　　桑原　　茂　　金井　純次
木村　千仞　　田島　直也　　麻生　邦典　　谷口　博信
第36回九州リウマチ研究会，1990，2，福岡

25　良きスポーツドクターとなるために医学部学生

田島　直也
第63回日本整形外科学会学術集会，1990，4，名古屋

26　RA 高度変形膝に対する人工関節置換術

税所幸一郎　　津曲　孝康　　桑原　　茂　　金井　純次
木村　千仞　　菅野　卓郎　　田島　直也　　麻生　邦典
谷口　博信
第34回日本リウマチ学会総会，1990，5，大阪

27　Cybex による脚筋力検査—第一報，女子長距離陸上選手—

黒木　俊政　　田島　直也　　黒木　龍二　　中村真由美
日高　　隆
第２回日本理学診療医学会，1990，6，仙台

28　胸腰椎疾患に対する改良型 segmental square spinal instruments （仮称３－Ｓ）の臨床応用について

田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一　　黒木　俊政
第19回日本脊椎外科学会，1990，6，京都

29　頚部椎間板ヘルニアに対する Gd-DTPA 使用 MRI の経験

松本　宏一　　田島　直也　　田代　宏一　　松田　寿義
鳥取部光司　　園田　典生　　永井　孝文
第79回西日本整形・災害外科学会，1990，6，福岡

30　RA 外反母趾に対する手術法の検討—関節固定法と Keller 法について—

麻生　邦典　　税所幸一郎　　桑原　　茂　　金井　純次
津曲　孝康　　田島　直也　　木村　千仞
第79回西日本整形・災害外科学会，1990，6，福岡

31　大腿骨骨頭骨折の治療経験

立山　洋司　　長鶴　義隆　　森田　信二　　作　　良彦
坂本　康典　　田島　直也
第79回西日本整形・災害外科学会，1990，6，福岡

32　骨盤骨折の合併症

津曲　孝康　　税所幸一郎　　桑原　　茂　　金井　純次
麻生　邦典　　田島　直也
第79回西日本整形・災害外科学会，1990，6，福岡

33　小児上腕骨外顆骨折の治療経験

戸田　　勝　　田島　直也　　中村　誠司　　永井　孝文
第79回西日本整形・災害外科学会，1990，6，福岡

34　股関節軟骨融解の治療経験

作　　良彦　　長鶴　義隆　　森田　信二　　立山　洋司
坂本　康典　　田島　直也
第79回西日本整形・災害外科学会，1990，6，福岡

35　腰椎後側方固定術の骨癒合に関する検討―Q·C-T1　レ線的検討を中心として―

田代　宏一　　田島　直也　　松本　宏一　　柳園賜一郎
松田　寿義　　鳥取部光司　　園田　典生
第79回西日本整形・災害外科学会，1990，6，福岡

36　女子長距離陸上競技選手の最大酸素摂取量―第２報―

黒木　俊政　　田島　直也　　黒木　龍二　　中村真由美
日高　　隆
第79回西日本整形・災害外科学会，1990，6，福岡

37　腰仙椎後側方固定術の長期成績について

田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一　　松田　寿義
鳥取部光司　　園田　典生
第33回西日本脊椎研究会，1990，6，福岡

38　自己血輸血施行手術例における Epoch の有効性について

黒木　龍二　　長鶴　義隆　　作　　良彦　　森田　信二

立山　洋司　　田島　直也

第20回宮崎整形外科懇話会，1990，7，宮崎

39　RA 手術患者の合併症

黒田　　宏　　桑原　　茂　　伊勢　紘平　　田島　直也

第 2 回宮崎リウマチ研究会，1990，7，宮崎

40　宮崎県高校陸上選手の基礎体力評価（第一報）

黒木　俊政　　田島　直也　　黒木　龍二　　中村真由美

日高　　隆

第16回日本整形外科スポーツ医学会，1990，7，東京

41　腰椎疾患の治療

田島　直也

第10回整形外科看護セミナー，1990，7，京都

42　健康と運動・スポーツ，スポーツ障害と予防について

田島　直也

平成 2 年度宮崎医科大学公開講座，1990，7，宮崎

43　長距離陸上選手のスポーツ障害

田島　直也

美唄市医師会第 3 回医学研修会，1990，8，北海道

44　スポーツと腰痛

田島　直也

佐世保整形外科医会講演会　特別講演，1990，8，長崎

45　RA 膝に対する cementedTKR の検討

黒木　龍二　　税所幸一郎　　谷口　博信　　木村　千仞

桑原　　茂　　伊勢　紘平　　田島　直也

第37回九州リウマチ研究会，1990，9，鹿児島

46　ダイナトラックによる筋力評価

黒木　俊政　　田島　直也　　中村真由美

第１回アイソトニック・キネティックセミナー，1990，９，東京

47　骨折治癒過程における肥満細胞の関与について―骨芽細胞を介した仮骨吸収促進の順序―

谷口　博信　　桑原　　茂　　田島　直也

第５回日本整形外科学会基礎学術集会，1990，10，兵庫

48　乳癌手術術後の上肢機能障害の検討―アンケート調査による―

日高　　隆　　平川　俊一　　三股　恒夫　　伊勢　紘平

田島　直也　　難波　　清　　瀬戸口敏明

第13回宮崎リハビリテーション研究会，1990，10，宮崎

49　健常者の体幹筋力についての検討

中村真由美　　黒木　俊政　　田島　直也　　伊勢　紘平

第13回宮崎リハビリテーション研究会，1990，10，宮崎

50　スポーツとリハビリについて

田島　直也

宮崎県スイミングクラブオーナーズ協会，1990，10，宮崎

51　当科における神経鞘腫の検討

久保紳一郎　　田島　直也　　桑原　　茂　　松本　宏一

田代　宏一　　黒田　　宏

第34回西日本脊椎研究会，1990，10，高知

52　慢性関節リウマチのP-NMRスペクトルの検討

麻生　邦典　　藤本登四郎　　田島　直也　　桑原　　茂

税所幸一郎　　金井　純次　　谷口　博信　　岡田　明彦

第18回日本リウマチ関節外科学会，1990，10，栃木

53　股関節症に対する内反骨切り手術の適用

長鶴　義隆　　森田　信二　　立山　洋司　　作　　良彦

黒木　龍二　　田島　直也

第18回日本リウマチ関節外科学会，1990，10，栃木

54　リウマチ股（Protrusio acetabuli）に対しフィブリン糊を使用し骨移植を併用した人工股関節置換術の検討

税所幸一郎　桑原　茂　田島　直也　金井　純次
津曲　孝康　麻生　邦典　木村　千仞
第18回日本リウマチ関節外科学会，1990，10，栃木

55　スポーツによる脊椎障害—特に腰痛を中心として—

田島　直也
第146回熊本整形外科勤務医会，1990，10，熊本

56　股関節症手術に対する自己血輸血施行例におけるエリスロポエチンの使用経験

帖佐　悦男　長鶴　義隆　田島　直也
第２回宮崎造血因子研究会，1990，10，宮崎

57　寛骨臼球状骨切り術（SAO）の合併症に対する処置とその予後

長鶴　義隆　森田　信二　帖佐　悦男　立山　洋司
田島　直也
第17回日本股関節研究会，1990，11，東京

58　先天股脱治療後の補正手術の成績と適応

長鶴　義隆　森田　信二　立山　洋司　作　良彦
黒木　龍二　田島　直也
第１回日本小児整形外科学会，1990，11，東京

59　腰部椎間板ヘルニア手術例及びキモパパイン例における術後MRIの検討

松本　宏一　田島　直也　桑原　茂　久保紳一郎
黒木　隆男
第80回西日本整形災害外科学会，1990，11，宮崎

60　多発骨折損傷例についての検討

坂本　康典　黒木　俊政　大江　幸政　津曲　孝康
税所幸一郎　桑原　茂　田島　直也
第80回西日本整形災害外科学会，1990，11，宮崎

61　大腿骨頸部 fibrous dysplasia の治療経験

鳥取部光司　長鶴　義隆　帖佐　悦男　田中　史郎
工藤　勝司　田島　直也
第80回西日本整形災害外科学会，1990，11，宮崎

62　股関節症に対する寛骨臼球状骨切り術（SAO）の成績

長鶴　義隆　帖佐　悦男　鳥取部光司　田中　史郎
工藤　勝司　田島　直也
第80回西日本整形災害外科学会，1990，11，宮崎

63　股関節症手術における自己血輸血施行例に対する EPO の有効性について

森田　信二　長鶴　義隆　帖佐　悦男　黒木　龍二
園田　典生　坂本　康典　田島　直也
第80回西日本整形災害外科学会，1990，11，宮崎

64　股関節部離断性骨軟骨炎の成因について

帖佐　悦男　長鶴　義隆　鳥取部光司　田中　史郎
工藤　勝司　田島　直也
第80回西日本整形災害外科学会，1990，11，宮崎

65　椅子座位からの立ち上がり動作の分析

川越　正一　岡本　義久　馬場　秀夫　長倉　紘一
田島　直也　山口　一郎
第80回西日本整形災害外科学会，1990，11，宮崎

66　Wagner 創外固定器を用いた上腕骨遠位端骨折の治療経験

樋口　潤一　戸田　勝　中村　誠司　山口　一郎
田島　直也
第21回宮崎整形外科懇話会，1990，12，宮崎

67　当科における原発性骨・軟部悪性腫瘍の治療成績

大田　博人　桑原　茂　黒木　隆男　黒田　宏
久保紳一郎　園田　典生　田島　直也
第21回宮崎整形外科懇話会，1990，12，宮崎

68　脛骨に発生した骨肉腫に対する患肢温存手術の経験

松元　征徳　　桑原　　茂　　黒木　隆男　　黒田　　宏

久保紳一郎　　大田　博人　　田島　直也

第21回宮崎整形外科懇話会，1990，12，宮崎

69　大腿骨頭辷り症の治療経験

尾田　朋樹　　長鶴　義隆　　帖佐　悦男　　鳥取部光司

田中　史郎　　田島　直也

第21回宮崎整形外科懇話会，1990，12，宮崎

70　脳性麻痺性股関節障害に対する寛骨臼球状骨切り術の治療経験

田中　史郎　　長鶴　義隆　　帖佐　悦男　　鳥取部光司

尾田　朋樹　　田島　直也　　岡本　義久

第21回宮崎整形外科懇話会，1990，12，宮崎

71　宮崎県における脊椎損傷の疫学的検討，1989年度1年間における発生状況について

久保紳一郎　　田島　直也　　黒田　　宏

第21回宮崎整形外科懇話会，1990，12，宮崎

72　RA 頚椎病変に対する laminoplasty の治療経験

園田　典生　　田島　直也　　桑原　　茂　　松本　宏一

第21回宮崎整形外科懇話会，1990，12，宮崎

73　当科における若年性腰部椎間板ヘルニア手術例の検討

黒木　浩史　　田島　直也　　桑原　　茂　　松本　宏一

久保紳一郎

第21回宮崎整形外科懇話会，1990，12，宮崎

74　アイソトニックマシンによる筋力評価

黒木　俊政　　田島　直也　　中村真由美

第3回九州スポーツ医科学会，1990，12，福岡

75　九州一周駅伝シンポジウム，長距離陸上選手の運動生理学的検討―第3報―

黒木　俊政　　田島　直也　　中村真由美

第3回九州スポーツ医科学会，1990，12，福岡

76　ランニングの運動生理学的検討

田島　直也

第14回東邦大学整形外科懇談会，1990，12，東京

77　先天性股関節脱臼に対する治療経験

平川　俊一　　長鶴　義隆　　森田　信二

第２回西日本小児整形外科学会，1990

78　股関節症に対する寛骨臼球状骨切り術（SAO）の適応の限界

長鶴　義隆　　平川　俊一　　森田　信二　　帖佐　悦男

第63回日本整形外科学会，1990

79　大腿骨頭骨折の治療経験

立山　洋司　　長鶴　義隆　　森田　信二　　作　　良彦

坂本　康典　　河野　雅行　　田島　直也

第79回西日本整形災害外科学会，1990

80　股関節軟骨融解の治療経験

作　　良彦　　長鶴　義隆　　森田　信二　　立山　洋司

坂本　康典　　田島　直也

第79回西日本整形災害外科学会，1990

81　Dewar 法による肩鎖関節脱臼の治療経験

中村　誠司　　戸田　　勝　　永井　孝文　　園田　典生

長鶴　義隆　　田島　直也　　押川紘一郎　　河野　雅行

第79回西日本整形災害外科学会，1990

82　股関節症に対する内反骨切り術の適応

長鶴　義隆　　帖佐　悦男　　森田　信二　　立山　洋司

鳥取部光司　　田島　直也

第18回日本リウマチ関節外科学会，1990，10，宇都宮

83　寛骨臼球状骨切り術（SAO）の合併症に対する処置とその予後

長鶴　義隆　　帖佐　悦男　　森田　信二　　立山　洋司

田島　直也

第17回日本股関節研究会，1990，11，東京

84　先天股脱治療後の補正手術の成績と適応

長鶴　義隆　　帖佐　悦男　　森田　信二　　立山　洋司
鳥取部光司　　田島　直也
第１回日本小児整形外科学会，1990，11，東京

85　大腿骨頸部 fibrous dysplasia の治療経験

鳥取部光司　　長鶴　義隆　　帖佐　悦男　　田中　史郎
工藤　勝司　　田島　直也
第80回西日本整形・災害外科学会，1990，11，宮崎

86　股関節症に対する寛骨臼球状骨切り術（SAO）の成績

長鶴　義隆　　帖佐　悦男　　田中　史郎　　鳥取部光司
工藤　勝司　　田島　直也
第80回西日本整形・災害外科学会，1990，11，宮崎

87　股関節症手術における自己血輸血施行例に対する EPO の有効性について

森田　信二　　長鶴　義隆　　帖佐　悦男　　黒木　龍二
園田　典生　　坂本　康典　　田島　直也
第80回西日本整形・災害外科学会，1990，11，宮崎

88　股関節部離断性骨軟骨炎の成因について

帖佐　悦男　　長鶴　義隆　　鳥取部光司　　田中　史郎
工藤　勝司　　田島　直也
第80回西日本整形・災害外科学会，1990，11，宮崎

編　集　後　記

同門会誌第３号が出来ました。昨年末に第２号が出来た直後より、更にいいものを早くだしたいと考えていたにも拘らず、またもや年末の出版となりました事を深くお詫び致します。今年も教室の主管として第４回九州スポーツ医科学会が執り行われ無事にクリアできましたのも教室員一同のお蔭と思っています。今年は残念な事にスミス先生の訃報が突然入りましたが、心よりご冥福をお祈り致します。

今回の同門会誌の編集に当たりまして感じました事を一つつけ加えますが、原稿を依頼して１週間も経たないうちに提出された先生、締切日を過ぎても提出してくれない先生と、千差万別でした。編集してくれる委員の方も大変でした。

次号の時はもっと早く原稿下さーい。

御多忙にも拘らず原稿を御寄せ下さった先生方に厚く御礼申し上げます。業績は１年後れの平成２年度分です。最後に第４号がもっと充実したものになるように念じて編集後記と致します。　〈伊勢記〉

Ｈ３.12.１

宮崎医大整形外科学教室

同　門　会　誌

発 行 日　平成３年１２月１０日
発 行 者　宮崎医科大学整形外科学教室同門会
編集責任者　伊　勢　紘　平
印 刷 者　㈾ 愛　文　社　印　刷　所